

修猷館同窓会誌

2020

菁莪

令和 2 年 January/Seiga



表紙解説

第9回ラグビーワールドカップが2019年9月20日から11月2日にかけて日本で開催され、福岡市はサモア代表チームの公式キャンプ地となっていました。

10月8日に、福岡市博物館で開催中の特別展「侍～もののふの美の系譜～
The Exhibition of SAMURAI」を観覧のため訪れたサモア代表チームを修猷館ラグビー部が出迎えて交流会を行った時の写真です。

修猷館同窓會誌

菁 莪

御挨拶

修猷館と五輪……………川崎隆生…1

随想

中京修猷会、記念座談会から……………岡本泉…2

『生きがい』と『友情』……………田中丸善彦…8

修猷館は岐阜県垂井町とゆかり(所縁)あり……………鬼木博文…12

東証一部上場を終えて……………添田英俊…13

魂ふるえたOne TeamラグビーW杯……………松瀬学…15

みんな知ってるインターネットの誰も知らない運営の現場……………前村昌紀…19

伝統工芸に求められる自立と自律……………大淵和憲…22

すべては「人」なり……………前川由希子…25

キャリアアセミナーを終えて……………田中大一郎…28

館歌は社会人の猷するべ……………中原一…32

部活OB会……………

修猷館柔道部の活動と記念史……………

花盛り同窓会……………

令和元年度同窓会総会報告……………

THANKYOU 修猷 大館謝祭……………三戸宗一郎…34

東京修猷会総会報告……………渡邊智彦…36

近畿修猷会2019年 年度幹事を終えて……………廣津聖子…37

支部だより……………

近畿修猷会……………芦原直哉…40

北九州修猷会……………檀博史…40

佐賀修猷会……………駒井英基…41

長崎修猷会……………宮下武彦…42

大分修猷会……………井上正文…43

熊本修猷会……………荒川浩成…44

宮崎修猷会……………光田靖成…45

沖繩修猷会……………山崎秀雄…45

東北修猷会……………出納克彦…46

中国四国修猷会……………河野浩…48

「さんさん会」を閉じる……………露木喬…50

昭和三十三年卒、解散同窓会総会報告……………瀧山龍三…52

卒業六十年を迎えて―三思会報告……………藤生俊郎…55

獅子の会 卒業50周年記念同窓会報告……………麻生俊郎…55

還暦遠足顛末記 ごじゆうに会(昭和52年卒)……………藤田豪太郎…57

卒業二十五周年学年同窓会から……………党智…59

学年一口連絡アンテナ……………

学校報告……………

同窓会の歩み……………

役員会・学年幹事会報告……………

お知らせ……………

同窓会における名簿管理について……………松本一範…73

平成30年度 同窓会収支決算書……………

令和元年度 同窓会収支予算書……………

平成30年度 同窓会会費入金状況……………

修猷館同窓会役員名簿・各支部会長名簿……………76

御挨拶

修猷館と五輪



同窓会会長
川崎 隆生
(昭和44年卒)

2020年の幕が開きました。国内はもちろん世界各地で活躍されている修猷館同窓会の皆様にとつて、希望に満ちた1年なることをお祈り申し上げます。

今年がどんな年になるのか考えるとき、まず思い浮かぶのは1964年以來56年ぶりに東京で開催されるオリンピック・パラリンピックでしょう。7月24日の開会式から9月6日のパラリンピック閉会式まで日本全体が「オリ・パラ」色に染まります。

前回の東京五輪は高度成長の真つただ中でした。東京起点の高速道路や新幹線が一気に整備され、戦後の経済復興に勢いがつくと同時に、政治、経済、文化、スポーツなど都市機能の東京集中が進むことになりました。半世紀を経て再び東京で開かれる五輪は、国と地域にどのような変化を及ぼすのか。五輪をきっかけに強まる海外からの関心を地方にも向け、地域の活力と新たな国際交流を推進したい。そのためには東京にはない地域の多様で個性豊かな文化や暮らし、歴史を発信する必要があります。と思います。同窓会としても何ができるかを考えます。

東京五輪のメインスタジアム・国立競技場に翻つた五輪旗が修猷館の資料館に展示されていることをご存知でしょう。安川電機の創設者で東京五輪組織委員会会長を務めた安川第五郎氏（明治39年中学修猷館卒、第2代同窓会会長）が国際オリンピック委員会（IOC）のブランディング会長（当時）から寄贈され、「後輩のために」と母校に寄付されました。

毎年9月の運動会開会式で30年以上も生徒と行進した五輪旗。その5つの輪は五大陸を表し、世界平和を願うオリンピック精神の象徴です。金子堅太郎、広田弘毅など平和を希求して世界の外交舞台で活躍した先輩が築いてきた修猷の伝統に通じるものがあります。

2004年の正月、東京修猷会の「二本会」で、修猷出身では唯一人の五輪金メダリスト葉室鐵夫さん（昭和10年卒）が講演されました。ヒットラー全盛時代の1936年8月、ミュンヘンで行われた200メートル平泳ぎでドイツのエルヴィン・ジータスにわずか0.4秒差で勝ちました。同種目女子で優勝した前畑秀子さんも同じくドイツのマルタ・ゲネンゲルを破って優勝しました。半年前の2月に東京では二二六事件が起り、直後に広田弘毅内閣が誕生しています。

競技生活後、毎日新聞の記者になった葉室さんは「表彰式で観客席の日本人数百人が君が代を歌うとヒットラーも立ちあがり、右手を挙げるナチス式の敬礼をしました。ヒットラーに心酔した時期もありましたが、研究書などを読んで悪魔の総統になった経緯がよく分かりました」と話されました。講演の最後に古代オリンピック以来の五輪開催中の「不戦運動」を続けることが五輪選手の責任と言われ、「平和の祭典」の意義を語られました。その年の10月にお亡くなりになりました。「不戦運動」への呼びかけは後輩への最後のメッセージだと思っています。（了）

【中京修猷会、記念座談会、から】



岡本 泉
(座談会司会／昭和42年卒)



仲村 晴朋
(座談会企画／昭和38年卒)

「修猷館関連」と「黒田藩の歴史」に括る

2018年6月に中京修猷会会報「猷交」60号の節目に座談会を開催し、中京地区で活躍された修猷の先輩方の足跡を辿りながら、修猷生に共通する気風や特徴を探りました。

そもそも修猷館とは黒田藩の歴史の中でどんな位置づけだったのか：それは今の私たちを理解する上でとても重要だと思ひ、藩校時代から現在までを概観した資料も配布しました。座談会では中京修猷会古参の先輩諸氏にその思いを馳せましたが、修猷館創設について歴代の黒田藩主がどう考えて行動し、創設後にはいかなる人々が関与してきたのか、再度、座談会当事者の二人が振り返りました。

同窓会活動の今日的意義とは

仲村・そもそも同窓会活動の意義は何でしょう？自分は中京修猷会の会報「猷交」を発行し続けて20年余りを経りましたが、いまだにその意義の明確な答えを見いだせていません。

岡本・人類史上例の無い超高齢化社会に我が国は突入し、私たちは今、未経験の社会システム変化の中で暮らしています。同窓会活動の意義や意味も変貌しつつあります。230年余りの歴史を積み重ねた修猷館の教育が私たちのなかにどう息づいているか、「アイデンティティ」を探る必要があると思います。

修猷生の気概・気風

仲村・母校を語るとき気風・気質とか土地柄とか校風などに言及されることが多いですが、修猷はどうでしょうね？

岡本・今は福岡ですが、私は40年余り名古屋に暮らして福岡との気質の違いを強く感じてきました。名古屋の人は血の気が足りないんじゃないか？…と。血の気が多寡を「やる気の有無」志の有無などに言い換えてみると人間の行動起点が焙り出せる気がしています。そんな思いから修猷人の精神的風土を追ってみるのは意義あることだと感じています。

仲村・多様・多彩な修猷館の出身者に通底する気概や気風のよなものがありますかね。

岡本・難しい言い方では「独立不羈の精神」と表されることが多いようです。修猷再興50周年の雑誌「修猷」（昭和10年）に檄文のような巻頭の辞があります。修猷は世に誇るすばらしい学校だと自慢した後次のように結んでいます。「我々は徒に過去の歴史にのみ陶醉すべきに非ず。伝統の蔭に隠れて惰眠を貪るべきに非ず。すべからく先輩の驥尾に追隨して益々本館の名譽を發揚すべきなり。見よ、星章の下、伝統の修猷魂は我々の指導原理としてとこしへに燦として輝けるに非ずや。敢えて生徒諸君の自覚を促す。」「良いところに行つたんだから私達は良いんだ」じゃなくて「それを良い様相にしていくのはあなたたちだ」と言っている、まるでケネディ演説を先取りしたみたいですね。

仲村・しかし80年余りも前の気概、氣風が現代の修猷に伝わっているかどうか。

岡本・筑前藩校絵巻というDVD（RKB制作）がありまして：修猷館の新講堂落成記念に唐人歌舞伎をやつた録画なんです。その物語のキャッチコピーが結構興味深いですよ：「学問は思想をつくり、思想は志を生み、志が生きる道を決める」。知る人ぞ知る、関西を活躍の場としながらも海外にも出る、ちんどん通信社の林幸治郎氏（昭和50年卒）がチンドン芸として和洋合奏をやっていました。和魂洋才という言葉のように性格の違う物を融合させて利用する文化や氣風が文明開化の時代にはあつたような氣がします。私達が育つたあの学校の根っこに、どんな文化・氣風があつたのか考えてみるとつといるんな様

相が出てくるように思います。

仲村・ということは修猷には奇才（変わりモン）を尊重する氣風や文化はあつたということですか？

岡本・修猷館の先輩に夢野久作（明治41年卒）という小説家がありますが、玄洋社の杉山茂丸さんがお父さんで本名は杉山泰道という名でお坊さんでもありますし絵もなかなかの腕で実に多様な世界に関わつておられます。彼の小説を読んだ父親から「夢野久作さんのごたる」と評されてそれをペンネームにされたようです。福岡では夢を見てふわふわしているような頼りない人をこう称するのですが、修猷出身者にはそのような人がいっぱい居るような氣がします。ある意味で奇才ですね：ちよつと不思議な人。修猷館に巣くつた奇才の流れを辿るとまた別の見方が広がるかも知れません。まあ「修猷には変わりモンが多かあ」とも言えるわけで（笑い）普通ならふて腐れる所を逆に面白がつてしまう：別の笑い話ですが「朱に交われれば赤くなる」をひっくり返して「朱に交われれば真つ赤になつて染め返す」のように自分の立ち位置を動かして面白がつてしまうタイプが結構居たように思います。

藩校が誕生するまでの流れとその後

岡本・私達は通常、天明4年に藩校として修猷館が生まれたという程度の認識しか持っていないませんが誕生以前からの大きな文

化的蓄積を知る必要があります。

△3代光之の代に修猷館開設の素地▽

岡本…福岡黒田藩は黒田長政が関ヶ原合戦の恩賞として徳川家康から52万石を授けられたのが始まりです。2代目忠之の代に黒田騒動がありました。3代光之は名君の誉れ高く、学問を奨励して文治政治の時代を開きました。

「養生訓」の具原益軒、「農業全書」の宮崎安貞などが活躍しましたが、光之は特に益軒に目を掛けて10年間も京都へ藩費遊学させています。当時最新の医学や学問に触れ多様な人脈も獲得して福岡にそれをもたらした意義は非常に大きかったと思われれます。益軒は「黒田家譜」も編纂するなど様々な著作を成しましたがいつも貧乏していたので損軒と名乗っていたそうで養生訓がベストセラーになってから益軒と名乗ったようですね。この益軒の教えの先に修猷館誕生が繋がります。

仲村…その修猷館誕生には直接繋がらないでしょうが、黒田藩を語るうえで6代目の継高は外せません。この代では毎年のように洪水、干ばつに悩まされ財政が窮乏する中、農・財政改革に着手し「御積帳（予算書）」を導入します。以来、それに基づき藩政が行われ藩は安定、継高の世は50年に及び黒田藩中興の祖と言われています。この重要な継高の学問に関する記録を私は知りませんが、農・財政立て直しを最優先せざるを得なかったなかで、本心は学問にも目を向けたかったのではと思いますね。

△修猷館創設に繋がる具体的な動き▽

岡本…そうでしょうね。で、話を戻すと3代光之は後に修猷館を開くことになる竹田家を京都から連れてきて福岡竹田の初代（定直）を益軒に学ばせています。以後、この竹田家が黒田藩の藩儒として教育の要になっていきます。この時に種まきされた教育システムが7代藩主治之の代に新しい動きを見せます。

仲村…7代藩主・治之が学問所創設を準備したそうですが、その時代背景はどうだったのでしょうか？

岡本…治之は一橋徳川家から迎えられた養子で8代將軍吉宗の孫にあたり、時代の変化に即した実学的な気風をもたらします。実学的性格を持った医者で儒者の亀井南冥を抜擢したのもその流れと思われれます。二つの学問所の開設を準備しながら死の床に就いた治之は実現を後代に託します。因みに治之を養子に迎えた折に黒田家の血を引く姫が先立ったため、純粹な黒田の血筋はここで絶えたと言われています。

△9代斉隆の世に修猷館開設▽

仲村…9代斉隆によって修猷館と甘棠館が開設されましたが、二つの学問所併設は珍しいですね。併設した理由は何だろうか。

岡本…8代の治高はわずか数ヶ月の治世で早世し、9代藩主として再び一橋家から斉隆を迎えます。11代將軍家斉の弟で、非常に開明的な方だったようです。斉隆は治之の遺言を実行し

1784(天明4)年に東(修猷館)と西(甘棠館)の学問所を開設しました。これがご存じ修猷館の始まりですが準備・開設とも一橋家から迎えた藩主によって進められたと言えます。開設の主旨に「諸士仲間^{しんぐわん}に恥をわきませず、心得違い出来候根元は、多くは稽古事をも心がけず、自由に暮し候ゆえ文盲懦弱にて道筋存ぜざる事起こり申す儀にて候」として教育の重要性を訴えています。

仲村…それで修猷館と甘棠館はどんな関係だったのでしょうか？
岡本…秩序を維持する教えの基本として藩儒の竹田定良に東学問所、陽明学にも通ずる実学重視の徂徠学を講ずる亀井南冥に西学問所を委ね異なるタイプの両学問所が、お互い切磋琢磨することを期待していたように思われます。しかし1790(寛政2)年、幕府は「寛政異学の禁」で湯島聖堂の朱子学に反する儒学を禁じ、徂徠学派だった甘棠館の亀井南冥は罷免されたため私塾「亀井塾」を起こします。その後亀井塾の流れは日田の広瀬淡窓らにより幕末まで引き継がれ、明治以降の近代化に大きな影響を与えます。9代斉隆の実子10代^{ひらきよ}斉清は蘭癖大名と言われるほど学問好きで博物学にも通じ、とりわけ植物と鳥類を愛しました。黒田藩は2代忠之の時から、鍋島藩と長崎の警護を担わされていて10代^{ひらきよ}斉清も長崎のシーボルトを訪ねて博物学の交流を行ったようです。

△開国を進言した11代長薄▽

仲村…最後の殿様といわれる11代^{ながひろ}長薄は、幕末から明治の時代変革に自身が翻弄されたようです。

岡本…長薄は島津家からの養子です。実父、養父いずれも著名な蘭癖(蘭学通)大名で、兄弟のように育った島津斉彬とともに希有な開明藩主であったと思われる。大藩の黒田藩が幕末維新の時代に大きな役割を演じられなかったのは幕府、薩摩双方に繋がりが深すぎたからかも知れません。黒船来航ではいち早く幕府に建白書を出して現実的な開国論を述べ幕府側を驚かせたようですし、幕末には医学校「養生館」を開き九州帝国大医学部の礎となっています。ちなみに医学校付属の診療所は修猷館のなかにあったようです。

△廢藩後、当主の目は海外に▽

仲村…廢藩置県後の修猷館再興への動きには、黒田家や藩校出身者の強い想いがあつたらしいですね。

岡本…長薄は官ばかりでなく野の勢力、例えば玄洋社の杉山茂丸とも交流するなど多様な世界を内包した殿様だったようです。第12代^{ひらきよ}「当主」長知を岩倉使節団に同行させてハーバード大学に留学させ、随行させた藩校修猷館の英才二人、金子堅太郎と団琢磨もハーバード大学とマサチューセッツ工科大学に学ばせており、黒田家が洋学を重視していた様子が窺えます。金子堅

太郎は13代当主となった長成ながなりにケンブリッジ大学への留学を奨めていきますし、長成はその後、英語専修学校として1885年(明治18)に復活していた修猷館の3代目館長を務めています。2代目館長の時、行軍中の軍隊に生徒が投石したとされる事件收拾のための就任と思われませんが、この難しい時期に実務処理を託されたのが館長代理の今立吐醉いまだてとすいです。福井藩の今立は大物の教育者でペンシルベニア大学に学び、我が国最初の中学校である京都一中を立ち上げ初代校長を務めました。京都一中と修猷館の関係が深まるきっかけになったとも言われているようです。

仲村・再興修猷館の初代館長・隈本有尚ありたかは、団琢磨、金子堅太郎と縁浅からぬ関係があったそうですね。

岡本・隈本有尚は夏目漱石の「坊ちゃん」に登場する山嵐のモデルとも言われる人物です。久留米出身で現在の東大理学部では団琢磨に星学(天文学)を学んでいます。おそらくその縁から金子堅太郎の推挙を受けて初代館長に就いたと思われる。この隈本の東大予備門時代の教え子に夏目漱石、正岡子規、南方熊楠、秋山真之、山田美妙、本多光太郎ら錚々たる顔ぶれが並んでいて、まさに「坂の上の雲」の世界です。強い個性と高い見識が備わってこそ、この個性豊かな人々を導くことが出来たと思われれます。館長時代に九州帝国大学の誘致開設にも関与し、後年ドイツへ官費留学した折りに哲学者ルドルフ・シュタイナーに出会いその思想や「人智学」を我が国にもたらした人物でもあります。

仲村・13代以降の黒田家の活動はどうか？

岡本・13代以降は殿様のな性格はなくなり学者としての働きが顕著になります。14代長禮ながれは日本鳥学会設立、日本野鳥の会設立、山階鳥類研究所設立などに関わり、黒田家の什宝類を全て福岡市に寄贈しています。15代長久ながひさも鳥類学者として重きをなすし、黒田奨学会など奨学制度を整備して社会的活動を行っています。黒田家は金儲けと無縁の重要な行動を積み重ねているように感じられます。

修猷館における教育の本質

仲村・修猷館の教育とは、理念と実践の絶妙な組み合わせを実現するための意志力や胆力を育成するものだったのですか？

岡本・それはまだ何とも言えないでしょうが、行動的知識人として幕末明治期を生きた志士たちを見れば藩校が志を抱かせた可能性はありますね。朱子学を学ぶ所として開設された修猷館は洗練された学問体系によってあらゆることを理性的にとらえ、考えを整理する力を培ってきたと考えられます。そして実学的な側面も非常に重視したようです。黒田家が幕末から明治の激動期に、西洋文明の力の意味をいち早く理解し取り入れていたことが修猷館の再興に集約されていると思えます。

* 黒田家歴代藩主・当主

初代・長政 <small>ながまさ</small>	1600	黒田官兵衛長子 福岡藩祖
2代・忠之 <small>ただゆき</small>	1623	暴君と伝わる 黒田騒動
3代・光之 <small>みつひかり</small>	1654	学問奨励 天災続き財政改善励む名君
4代・綱政 <small>つなまさ</small>	1688	東蓮寺(直方)藩の養子 再び財政悪化
5代・宣政 <small>のぶまさ</small>	1711	病弱で実績残せず
6代・継高 <small>つぐたか</small>	1719	東蓮寺藩からの養子 治政50年
7代・治之 <small>はるゆき</small>	1769	一橋徳川家からの養子
8代・治高 <small>はるたか</small>	1782	京極家からの養子 早世
9代・斉隆 <small>なりたか</small>	1782	一橋徳川家からの養子 開明的
10代・斉清 <small>なりきよ</small>	1795	蘭癖大名 修猷館、甘棠館開設
11代・長溥 <small>ながのぼろ</small>	1834	島津家からの養子 蘭癖大名
12代・長知 <small>ながちか</small>	1869	版籍奉還時に藩知事 太政官札鷹造事件 1871年廃藩
13代・長成 <small>ながなり</small>	当主	3代目修猷館館長

—— 1885年 修猷館再興 ——



九州大学付風園書館 九大コレクション[福岡城下町・博多・近隣古図](文化9年1812年)より
<http://catalog.kyushu-u.ac.jp>

『生きがい』と『友情』



田中丸 善彦
第六八回生（昭和29年卒）

令和元年9月22日、ハワイアン・バンド『ア68（ロハ）ハワイアンズ』は、予定していたある老人ホーム慰問演奏会を直撃した台風のおかげで中止せざるを得なくなりました。

180回を超える演奏会では、老人ホームのインフルエンザやノロウイルスの流行などで演奏会が中止のやむなきに至った事はあったが、台風での中止は始めてであった。

私たちがハワイアン・バンドで老人ホーム慰問の演奏会を始めたきっかけは、修猷館高校卒業50周年を祝う同期会である。私たち昭和29年卒業生には第68回卒業生ということで『六八会（ロハカイ）』という名称がつけられている。当時の会長、倉成太郎を委員長とする準備委員会で、50周年記念事業をより立てる一つに学生時代のバンド演奏を再現しようという案が浮上した。

我々が学生時代の昭和27、28年は朝鮮戦争が始まった頃、音楽に関しても米軍のFENRAラジオ放送で珍しいJAZZを聴いて驚いていたぐらいで、楽器は高嶺の花、バンド演奏を楽しむというほどの洒落た時代ではなかった。それでも、我々の数年

前から時代先取りの先輩達が文化祭や卒業記念パーティなどで軽音楽の演奏を披露していた。

昭和28年、三年時の秋の文化祭では、この流れを受け継いで、同期生の水月文明がギター、波多江康平と山崎重昭がウクレレ、一学年下の前川実君がステイール・ギターで、4人がバンドを組んでウエスタンやハワイアンを演奏していた。

そのバンドを再現することになったのである。といっても、70歳近い同期生の中で楽器を楽しんでいるというのは聞いた事が無かった。

早速波多江が、ニューヨーク在住の弁護士水月にバンドマスターを承諾してもらい、福岡在住の山崎はウクレレで参加。そして、その他のメンバー集めにかかった。

東京に在住していた頃ママさんハワイアン・バンドを組んで活動していた田上（藤田）敦美はウクレレで参加。女性のコーラスには大穂（西島）幸代、真海（小林）ミヨ、伊藤紀子、勝野（山口）千鶴子の4名が参加してくれることになった。サイド・ギターは鹿島良平、瀬戸（安西）美都子と山口県宇部在住の阿部隆がウクレレで、さらに、私、田中丸は息子のベース・ギターを担いで参加することになった。波多江はステイール・ギターを受け持った。

ハワイアンの華、フラは、教室を持って活動していた名手諫山（内藤）安恵と田上がソロを踊り、前掲の4人のコーラスにもフラを指導して6人のフラ・チームが出来た。

ボーカルは結城威、岡部恒雄の二人。どうやらハワイアン・

バンドらしいものができたのが記念同期会の2年前であった。メンバーにとっては楽器に触るのも数十年ぶりといった状態。67歳の手習いでヤマハの音楽教室に通って必死に練習に取り組んだ。

チームの練習場には波多江が舞鶴の事務所を提供してくれたのでロケーションは極めて良い。平成15年6月より火曜日と土曜日の週2回を練習日とした。バンド・マスターの水月は、一人ニューヨークで練習に励んだ。幸いにも、ハミング・バーズという福岡在住のプロ・バンドのベ이스ト有田文二（昭和27年卒）先輩の指導を得てバンドの技術はみるみる上達した。

翌、平成16年5月にはニューヨークの水月に帰国してもらって、旧修猷館同窓会館でメンバーの家族を客に見立てたりハースルを行った。有田先輩から辛うじて合格点ももらったので自信がついてさらに練習に励んだ。

本番直前の7月に大腸癌が発見された山崎は手術を受けたが、演奏会直前に退院出来た。

元気に帰還した山崎をメンバーが拍手で大歓迎したのは言うまでもない。

平成16年9月6日記念同期会の当日は、午後2時から修猷館高校の新校舎の階段教室で元気な小柳陽太郎先生の記念講義である。講義は『述べて作らず、信じて古きを好む』という言葉から始まった。先生の講義で印象に残ったのは『私たちはある国ではなく、ある国語に住んでいるのだ。』という言葉。さらに太宰府万葉の話から、『1200年前の言葉（詩）がそのま

ま現代でも理解できるのは世界でも類を見ない。日本の言葉は素晴らしい』と結ばれた。

記念講義の後、東区の中道ホテルへバスで移動していよいよ宴会の始まりである。

東京からウクレレとボーカルで田中瑞穂とフラで中沢（城野）郁子が参加してくれたので、本番は総勢17名のハワイアン・バンドとなった。

ところが記念同期会の本番の夜は、なんと大型台風が福岡を直撃したのである。猛烈な雨風の中、同期会の宴会とアトラクションは何とか無事に終えることができたが、翌日の記念ゴルフ会は無残にも烈風に吹き飛ばされてしまった。もう一つ、参加予定の恩師池元治先生が残念ながら風邪気味で出席がかなわなかった。

折角これまで練習してきたのだから先生が入居されている老人ホームに出張演奏会でお慰めしようと言うことになって11月、糸島の老人ホームを訪ねた。

池先生はもとより、観客となっていたいただいた大勢の皆さんにも大変喜んでいただいた。そのときの経緯を西日本新聞の都市版の記者であった後輩の小野君が取材してくれた。『69歳バンドが94歳恩師を歌で励ませ』と言う紙面になった。

この演奏会で初めて、二年間苦勞して学んだハワイアン・バンドをボランティア活動で生かせる道が開けたのである。

情報によると、我々の親の世代が丁度老人ホームに入居している時期であった。手づるを頼って老人ホームと連絡を取ると

喜んで受け入れてもらった。次々に市内の老人ホームからの演奏の依頼が続き、毎週土曜日の練習と月に1、2回の演奏会で多忙な数年があつと言う間に経過した。その間、練習日には女性のメンバーが交替で昼食の弁当を準備してくれて練習が終わると談笑しながらの昼食が楽しみとなった。

数多くの訪問演奏会にはエピソードも多かったがその一つ。平成24年11月、生の松原のある老人ホームでのことである。演奏会が終わった頃、車椅子の老人が近寄ってきて『出来たら、修猷館の館歌を歌ってくれないか?』と尋ねられた。山中耕作さんと言われるその方は昭和39年から50年まで11年、修猷館で教鞭を執っておられたという。早速、司会の結城が音頭をとって「君見ずや 西のみ空に燦然と輝く 修猷星を」と東野浩先輩の巻頭言に次いでメンバー全員で館歌を歌った。山中さんは感涙に咽せておられたが、歌った我々も思いがけない経緯に感激した。

40度近い猛暑のコンクリートの駐車場での演奏会では終了の直後激しい夕立に見舞われ、慌てて片付けに走ったこともあったし、春風の強い駐車場での演奏会では楽譜が飛んでしまったこともあった。華やかなフラのメンバーが皆さんと握手すると涙を流して喜んでくれる方も多かった。メンバーで旅行をしたり食事会をしたりバンド活動以外にも楽しい思い出が沢山出来た。

残念な事も生じた。波多江康平と途中から参加していたハーモニカの名手小津和 宏が他界した。特にア68ハワイアンズ発起人の一人であった波多江は、癌に苦しみながら頑張ってきた

たが、50周年記念同期会の翌年4月、福岡大震災の直後にみまかった。熱心にバンドを作り上げてくれただけに残念でならない。修猷館を卒業している仲間を中心に長く続いている趣味のグループも沢山あると思うが、私の周りにはある二つのグループを紹介しよう。

一つはゴルフのグループ。同窓生によるゴルフのグループは数あるが、このグループは昭和12年、13年、14年卒業の3学年の先輩が始めた『三猷会』である。世話役も次々に後輩に申し送られて、現在の代表世話人は昭和35年卒の松尾学君。残っている記録によると昭和12年卒は妹尾孝泰、戸川博之など6名、13年卒の宮崎尚士、三島積他7名、14年卒の王丸磯樹、古川博他6名などの諸先輩の名が上がっている。成績表は昭和63年6月開催の第137回が最も古い資料であるという。毎月開催が原則ではあるが、高齢者ばかりのために雨が強いと中止する事を踏まえて逆算すると、始まったのは昭和51年か52年頃と思われるので、すでに40年を超える歴史が刻まれている。現在の最高齢者は86歳の昭和27年卒、岡沢猷夫、安武龍先輩。一番若いメンバーは70歳、昭和43年卒業の大野俊郎君である。

令和元年10月は第484回の大会であったので令和3年5月頃には第500回大会を迎えることになる。私も何とか元気で500回大会を迎えることが出来ると良いが。

さらに、音楽の部門では『月いち合唱団』。平成4年から22年まで修猷館高校で音楽教師として現役の合唱団を全国大会にまで導いた熱血先生、堀(大津)ミナ子教諭が卒業生を募って

平成10年頃、混声合唱団を組織し、修猷館の音楽教室で始めた合唱団だという。

始めは月に一回の練習であったので『月いち』と名付けられたが、10年を経過する内に練習日も月三回となり、堀先生の情熱的な指導と昭和43年卒業の刀根（黒田）真理子さんの熱心な世話で、令和元年10月現在では団員も50名を超え、福岡に数ある合唱団の中でもレベルの高い合唱団に成長した。メンバーの最長老は昭和20年卒の90歳、川村鈴二先輩で一番若年は平成21年卒の田畑あいさんである。ちなみに、六八会の同期生は、岡村祥三、塩野（小田）玲子、矢野（手島）和枝の三人が在籍している。

話は外れてしまった。こうして『ア68ハワイアンズ』はメンバーが83歳になる平成30年1月、寄る年並みには勝てず、演奏活動を終えることになった。

最後の演奏会を取材してくれた西日本新聞の飯田記者によると『修猷館高卒業生 有終ハワイアン』とのタイトルで『慰問先の人より年上に…』と。コーラスやフラを担当の大穂さんも『夢のような時間で、いい思い出が沢山出来た』。

『最後の曲は「幸せなら手をたたこう」。結城さんや女性コーラスの歌に乗せ、この日最も大きな手拍子が会場を包み込んだ。』と締めくくった。

想い出多き16年間。訪問した多くの施設の皆さんに喜んでいただいたこともさることながら、メンバー一同が楽しみ、喜びを実感した歳月であった。同期の修猷館六八会の諸君の暖かな

眼差しと友情に心から感謝の16年間でもあった。ア68ハワイアンズのメンバー、そして六八会々員に幸あれと祈り筆を置く。私ごとではあるが、『ア68ハワイアンズ』を解散した後、弟田中丸善昭（昭和37年卒）を中心に香月英氣（昭和52年卒）や、宮崎（畑地）由季（昭和54年卒）率いるフラティーム・プアナニなど10名で『プアナニ アロハ ハワイアンズ』を結成して活動を始めた。

冒頭の台風による訪問中止はこの『プアナニ アロハ ハワイアンズ』の出来事であった。

令和元年10月25日
記す



修猷館は岐阜県垂井町とゆかり（所縁）あり



鬼木博文

（昭和36年卒）

岐阜県在住の私が地元の歩こう会で岐阜県垂井町を訪れた際、「菁莪記念館」があるのに気付き、藩校修猷館の「菁莪堂」と何か関係あるのではないかと思ったのがそもそもの始まりでした。

ここは、黒田官兵衛と併せ二兵衛と言われる豊臣秀吉の軍師、竹中半兵衛の居城があったところで、官兵衛の息子が匿われて、殺されずに済んだという土地であることが分かりました。

今の兵庫県で三木城攻略中に、荒木村重が突然信長に反旗を翻した際は村重と親交のあった官兵衛が説得に行きますが、逆に捕らえられて土牢に幽閉されます。連絡が途絶えたまま戻らぬ官兵衛が自分を裏切ったと考えた信長は秀吉に官兵衛の息子松寿丸を殺すよう命じます。官兵衛を信じていた半兵衛は「松寿丸を殺した。」というその報告を行い（1578年）、密かに家臣の不破矢足の屋敷に匿った結果、お蔭で松寿丸は殺されずに、後の活躍につながったという歴史は皆さんご存じのことと思います。

垂井には、匿われた場所とされる五明稲荷神社、匿ったとさ

れる不破矢足の子孫の墓、菁莪記念館と竹中氏陣屋跡、半兵衛の墓等と、今も確認できる状態で残されています。この神社にある昭和16年（1941年）奉獻の石の鳥居には、「侯爵 黒田家 竹中家 氏子一同」の文字が刻まれています。

もし、松寿丸が垂井で殺されていれば、今の修猷館（1784年開学）はなかったかも知れません。この間200年余の年月はあるものの、その間を含め昭和まで、黒田家・竹中家両家の付き合いが連続と続いていたということからなお更、修猷館と垂井町の縁を感じる次第です。

「菁莪」という2文字から垂井町と修猷館が黒田長政公を通じて結びついたことで、岐阜県在住の私が母校修猷館を強く意識させられた垂井町訪問でした。

なお、御希望があれば極力現地を案内させていただきます。以上

連絡先 鬼木 博文

hmnok@nackne.jp



中京修猷会で訪れた菁莪記念館前

東証一部上場を終えて



添田 英俊
(昭和48年卒)

修猷館を卒業していまだに忘れられない言葉は、入学式の時に「修猷館に入学できたあなたたちは、もうすでに成功者であり人生の勝ち組です」と当時の館長が祝辞で話された言葉です。

経営者になって改めて感じるのは、本当に地元で活躍されている経済人には修猷館OBが多いということです。「経営者に石を投げたら修猷館にあたる」と言われる理由が良くわかりません。ビジネスの思わぬところで同級生との面会や再会することも多く、話はずみありがたいことだと思います。福岡が本社である正興電機製作所は、1990年に福岡証券取引所上場以来27年の時を経て2017年11月に東京証券取引所二部市場上場、そして翌2018年12月に同取引所一部市場への指定替えを果たすことができました。

弊社は2021年に創立100周年の節目を迎えます。福証上場以降、バブル崩壊後の日本経済は長い低迷時期に入り、当社は新事業への挑戦、変革に取り組み、主力の電力、環境、情報 の社会インフラ事業にて乗り越えてきました。

創立90周年では、製造・

開発の中心拠点である福岡県古賀市にある古賀事業所内に「グリーンイノベーション」事業、技術、情報の発信拠点としてのLサイトと社員のコミュニケーション、憩いの場としてRサイトを建設しました。

現在、中国大連、北京、マレーシア、フィリピンで海外事業会社を設立し

ておりますが、さらに今後のグローバルな事業展開の拡大を図るため、社会的信用度・知名度の向上を図るとともに、人材確保、内部管理体制の一層の充実・強化など事業の拡大に対応できる体制づくりが必要なときと考え、まずは東証二部市場を目指しました。

とはいえ、まず主幹事証券会社から上場審査に向けての厳しい指導を受け約一年半をかけ準備をしました。

しかし、準備するにもそれ自身がインサイダー情報になりま すので、敵を欺くには味方から実践しました。社員には東京証券取引所上場を目指すと言いながら、かたやその作業をしていることは社員にも悟られないよう、準備することに一番気を



製造・開発の中心拠点、古賀事業所Lサイト(古賀市)

使ったところででしょうか。

資料作りに関しては、上場プロジェクトを立ち上げ、会社の沿革から始まり管理体制、受注・生産・売上・入金にいたるフローや財務状況、事業上のリスクや課題への対応など事業運営に関する事項を現場での調査・確認を含めこと細かく作り上げていきました。

ちょうどこの時期に大企業の不祥事、役員等の報酬など世間で騒がれており、コーポレート・ガバナンスについての強化対策が話題になっておりましたので、上場に向けての情報統制の徹底、役員・社員・親族などのインサイダー取引、反社会的勢力排除の対応、勤務状況、不祥事の有無、相談役・顧問などの対応等々審査内容もその観点でより厳しくなっていました。幹事証券会社と何度も協議、問題をクリアにし審査に臨んでおりました。

私が社長となり、基準最短の一年後に一部上場を目指し早々に準備に取り掛かったのですが、これも作業に入ることはインサイダー情報と言うことで上場時期含め非公表にて進めましたので、社員のモチベーションを上げるのにも工夫を要しました。



一部審査では二部上場審査事項以外の事項を中心に、特に中長期計画、ガバナンス事項を重点に事前審査が行われました。中長期計画では、各年度の予算および達成へ向けての確実性や創立100周年に向けて大きな目標を掲げていましたので、その実現性への具体的取組み、コーポレートガバナンス・コードへの取組み状況など、まだ不確実なところも多く説明には苦慮しました。

最後に代表取締役への面談と言うことで、今後のビジネスモデル、事業拡大方針、コーポレート・ガバナンスの基本的な考え方、反社会的勢力の排除への取組み等々を聞かれました。

入社以来営業一筋で勤め上げてきましたが、この機会に改めて東証企業の一員としてしっかりと受け止めていかねばと再認識したところです。

100周年を迎えるにあたり、生産設備のリニューアルを計画しております。

2年後の100周年、それからの100年先を見据え、IT、IoT、AIの開発など目まぐるしく進化する環境に対応できる体制を整え、更なる変革に取り組みたいと思います。

最後になりますが、地元福岡で修猷館の先輩である弊社土屋会長（昭和39年卒）とともに私の社長の時代に東証一部上場を果たせたことは、卒業して初めて母校に貢献できた気がしております。

魂ふるえたOne TeamラグビーW杯



松 瀬 学
(昭和54年卒)

よか「お祭り」だった。日本初開催のラグビーワールドカップ（W杯）は、日本代表の初の決勝トーナメント進出（ベスト8入り）という活躍もあつて、列島中を沸かせた。

幸運にも、僕は取材で日本代表の5試合を含め18試合をスタジアムで観戦することができた。福岡の空港そばの博多の森球技場であった試合（2019年10月2日・フランス33-9米国）もカバーした。いつもココロがふるえた。現場で何度、泣きそうになったことか。このW杯をひと言でいえば？と問われれば、僕は自信をもって、こう答える。

「ワンチームの大会だった」

One Team。ワンチーム、ひとつのチームだ。日本代表チームのスローガンでもあり、なんと2019年の流行語大賞にもかがやいた。博多の森の試合が終わったあと、スタジアムのゲートの外には道の両側にボランティアがずらりと並んでいた。

満面の笑顔。おおきな声で「ハイファイブ（ハイタッチ）」

を求めてくる。

「さよなら」

「また、（福岡に）きんしゃい！」

「シー・ユー！（またね）」

この大会の成功の要因はいくつもあるだろうが、僕はボランティアの献身が一番だと思っている。かつて『幸せなら手をたたこう』という歌があつたけれど、自分の手をボランティアの手とパチンと重ねれば、ココロも躍り、幸せな気分になるのだった。福岡だけではない。大分も、熊本も、釜石も。W杯期間中、あちらこちらでハイタッチを通し、笑顔と友だちが増えたのではないか。これも、ワンチーム。W杯レガシーのひとつとして、僕はスポーツボランティア文化をあげたい。

▽赤白に染まった満員のスタンド

目を閉じれば、満員のスタジアムの熱狂がまぶたに浮かぶ。大会の観客動員数が170万4443人（台風による中止の3試合を除く）で、1試合平均は3万7877人だった。チケットは約185・3万枚が売れた。じつに販売分の99・3%だ。

W杯組織委員会の広報戦略長を1年半務めていた僕としては、うれしくて、うれしくて。W杯組織委の目標に掲げていた「全会場満員」がほぼ達成されたからだった。決勝の横浜国際総合競技場では7万103人を記録し、2002年サッカーW杯の決勝戦をうわまわった。

なぜだろう。もちろん日本代表の躍進が一番の理由だろうが、僕は福岡など各自治体のがんばりが大きかったと思う。開催地に決まって4年半、ラグビーの国際統括団体「ワールドラグビー」やW杯組織委の無理難題にもへこたれず、独自の盛り上げイベントなどを仕掛けてくれた。

今回、地域の自治体の底力を知った。そういえば、W杯前にあったTBSテレビの人気ドラマ『フーサイド・ゲーム』の影響もあったかもしれない。ラグビーW杯の放送権を持っていたのがNHKと日本テレビで、日本テレビのラグビー担当局長は僕の早大ラグビー部同期の本城和彦君だった。TBSの社長は早大ラグビー部で僕らのひとつ上の佐々木卓さん。こりゃ本城君は卓さんにお歳暮を贈らないといけないだろう。

いわば、自治体の盛り上げ策や人気ドラマなどで世の中のラグビー熱がお湯のごとく、あつたまっていたところ、W杯の日本代表の活躍で沸騰したといった感じなのだ。

スタジアムの満員の観客が試合を盛り上げてくれた。修猷2年、僕らは全国高校大会福岡県予選の決勝を平和台陸上競技場そばのラグビーグラウンドで戦った。グラウンド周りの土手には修猷の館友が群れとなり、応援部の先輩が仁王立ちで古びた濃紺のおおきな修猷旗を持ち続ていた。旗の真ん中の金色の六光星がまぶしかった。

修猷は勝った。僕は決勝トライをさせてもらった。わが人生、最高の思い出である。『彼の群小』を修猷の仲間がおらんでくれた。このシーンは、いつまでも僕のココロにピンク色の記憶

とともにある。このW杯では、赤白(日本代表のレプリカジャージ)に染まったスタジアムがピンク色に見えたのだった。

▽ダイバーシティとチーム・ラブ

おっと、感傷にはかり浸ってはいけぬ。W杯だ。日本代表だ。ワンチームだ。なぜ、ベスト8入りができたのか。総括会見で、日本代表のジェイミー・ジョセフヘッドコーチはこう、誇らしげに言った。

「チーム一丸となったからです。この3年間、ハードワークを続けてきた。そして、最後、ひとつのチームを作り上げることができました」

リーチ・マイケル主将はこうだった。

「ジェイミーがワンチームを作り上げてくれました。ワンチームになれたからこそ、目標(ベスト8)を達成できた。それをキャプテンとして誇りに思います」

チームとは、生き物である。いろんなことがあった。キーパードが『ダイバーシティ(多様性)』。フィジカルの強い海外出身選手を積極的に代表入りさせたため、結局はW杯メンバー31人中15人が海外出身選手という「多国籍チーム」となった。「3年継続して居住した国」などの条件を満たせば、その国の代表資格を得ることができるラグビーならではのダイバーシティのチームとなった。

日本代表はW杯ベスト8を目標に置き、過酷な長期合宿

(2019年は約240日)に取り組んだ。チームに必要なのは、最後に「チーム・ラブ」だろう。日本代表はハードワークに打ち込み、宿舍の食堂には赤色の甲冑を持ち込み、「君が代」をみんなで練習した。宮崎合宿では歌に出てくる「さざれ石」を見学に行った。広島、長崎への原爆投下の歴史も一緒に勉強した。リーチ主将はこう、言った。

「海外出身選手も、日本のために勝ちたいという意識が高まった」
日本代表がW杯初戦のロシア戦に勝利(○30・10)したあと、チーム主軸の「ラピース」ことピーター・ラブスカフニ(南ア出身)はこう、声を弾ませた。

「僕らは日本を代表して、ワンチームとなってゴールに向かっていく。たくさん時間を一緒に過ごし、たくさん練習してきた。僕らは「グローカー」なんだ」

グローカーもまた、チームの合言葉のひとつだった。国際的という意味の「グロバル」と地方や地元を示す「ローカル」を合わせた造語だった。

日本代表の2戦目、1次リーグの最大のアイルランド戦(○19・12)。ジョセフHCは試合直前のミーティングでこう檄を飛ばし、選手を鼓舞した。

「僕らが勝つことを誰も信じていない。接戦になるとも思っていない。僕らが歩んできた道のりを誰も知らない。自分たちしか知らない。信じられるのは自分たちだけ。自分たちがやってきたことを信じよう」

日本代表は勢いに乗り、サモア戦(○38・19)でも終盤にト

ライを重ねた。1次リーグ最終戦となる因縁のスコットランド戦(○28・21)は大型台風の影響で試合実施が危ぶまれていた。スタジアムは地下や駐車場が水に浸かったが、夜通しのスタッフの復旧作業の結果、試合日の午前、やっとで実施が決まった。ジョセフHCは試合前、台風による犠牲者を追悼し、いろいろな人々のサポートを説明した上で、感謝の気持ちを持って戦おうと選手たちに訴えた。

福岡出身のエース、ウイング福岡堅樹(福岡高卒)はこの試合、2トライを挙げる快走をみせた。試合後、こう漏らした。

「この試合のために、たくさんの方がいろんなところで作業をしてくれました。そういった方々にお礼を言いたい。そして、犠牲者を悼み、日本の力に少しでもなりたいと思ってプレーしました」

日本代表は1次リーグを4戦全勝の首位で通過したが、初めて進んだ準々決勝では南アフリカ(●3・26)に完敗した。試合後、ピッチに最後の円陣がつくられた。ジョセフHCも、スタッフも加わる。満員5万の観客でうまつたスタンドからあたたかい拍手と歓声が降り注ぐ。スタジアムには「ノーサイド・ゲーム」の主題歌、「馬と鹿」が流れていた。

リーチ主将が円陣で声を絞り出した。



「みんなを家族同様に思ってきた。下を向く必要はない。このファミリィを、キャプテンとして誇りに思っている」

笑わない男として人気が出たプロップ稲垣啓太が、ろつ骨を痛めたスタンドオフの田村優が、ホープのナンバー8姫野和樹が別れを惜しんで泣いていた。この光景こそワンチーム、全員にチーム愛が芽生えていた証だろう。

▽ワンチームで「彼の群小」を

ラグビーW杯の盛り上がり同様、日本開催もまた、奇跡だった。思い起こせば、いろんな人がラグビーW杯を夢見ていた。そんな人たちの夢や熱意、想いがあつたからこそ、この大会が実現した。

故人でいえば、2003年11月にイラクで殺害された外交官ラガーの奥克彦さん(享年45)ほか、日本ラグビー協会会長の町井徹郎さん(2004年没、享年69)、ミスター・ラグビーといわれた平尾誠二さん(2016年没、享年53)…。あるいはラグビーが大好きだった釜石の佐藤蓮晟(れんせい)くん(2017年没、享年13)。れんせい君は僕に生前、こう言った。「おれは、いろんな人とラグビーを楽しみたい。おじさん、ワールドカップでラグビーをもっと盛り上げてよ」

W杯の日本招致成功は元内閣総理大臣の森喜朗さん(元日本ラグビー協会会長、東京オリンピックピックパランピック組織委員会会長)の執念だった。(詳細は、新著『ノーサイドに乾杯』

ラグビーのチカラを信じて』(論創社)でどうぞ)

この盛り上がりを天国のれんせい君は喜んでいるだろう。僕らラグビー関係者の使命は、この熱をさらに大きくし、ラグビーを人気競技に変えていくことだろう。W杯のレガシーとして、「リスベクト」や「結束」「規律」を大事にするラグビー文化の普及も継続して進めなければならない。

プロリーグ化も喧伝されているが、より大事なのは、子どもたちへのラグビー普及である。安全性と快適性を担保する環境づくりが必要だろう。前回の2015年イングランド大会では、イングランド協会が余剰金で100面の芝生のグラウンドをつくった。では、今回はどうだろう？

そういえば、修猷館のグラウンドは2020年夏、約5億円をかけて人工芝に変わると聞いている。40年ほど前、僕は砂場のようなグラウンドでビフテキ(重度のすり傷)をしこたま、つくっていた。それが変わるのだ。サビシイ。いやウレシイ。九州の県立高校としては、修猷は、佐賀工高に次ぎ、2校目の人工芝グラウンドとなる。これもまた、修猷OBの「ワンチーム」となつての支援のお陰なのだろう。

ただ、くれぐれも『仏つくつて魂いれず』にならないよう願う。人工芝のグラウンドができて、選手やOBが魂を入れなければ宝の持ち腐れとなる。よし、魂を込めて、修猷健児を応援するぞ。「彼の群小」を歌うぞ。

ワンチームとなつて。がんばらんば。

(了)

みんな知ってるインターネットの

誰も知らない運営の現場



前村 昌 紀

(昭和61年卒)

ICT技術の発達は目覚ましい。今、私の世代でもほとんどすべての人がスマートフォンを持っていて、日常的にインターネットを通じて情報サービスを享受し、それに依存した生活を送っているように思う。日本でインターネットが一般の人々に浸透し始めたのは1995年。商用のインターネットサービスプロバイダー（ISP）が数多く名乗りを上げ、パソコンの基本ソフトであるWindows 95が、標準でインターネット接続をサポートした時期で、既に25年が経とうとしている。当時私はNECにいて、現在BIGLOBEと呼ばれる同社のインターネット接続サービスの立ち上げに、ネットワーク技術者として参加していた。

それまで研究者だけが使っていたインターネットが、一般にも門戸を開き、世界中の人々をつなぎはじめていた。一般の人々をつなぐ商用事業者のひとつであるBIGLOBEで、ネットワーク技術を担当することになった私は、自分のネットワークだけに、単なる涉外対応にも留まらない、日本のインターネットの運

営調整に関与するようになり、次第にアジア太平洋地域、世界全体のインターネットへと、関与の領域を広げていって、ついこれが本業となった。

今や誰もが日常的に使っているインターネットだが、その全体の運営調整に関してはあまりよく知られていない。2019年5月、元号が令和となって初の、東京修猷会二木会の講師を承ったため、館友の皆さんに説明するために、私の仕事を見つめなおすこととなった。今回は更に光栄にも、本誌菁莪に寄稿する機会をいただいたため、皆さんの情報社会生活を陰で支える、このインターネットの運営調整という世界のご紹介をさせていただきます。

インターネットは、誰でも接続して利用することができ、世界中と通信ができる、国際公衆電気通信サービスである。インターネット以外に国際公衆電気通信サービスがもう一つある。それは電話である。相手方の電話番号さえ知っていれば、料金はかかるものの、世界中のどこにでも接続することができる。ただし、電話とインターネットの運営調整のあり方は、根本から異なる。電話は、政府そして政府間組織が運営調整を担うが、インターネットの場合、民間主導の枠組みによって運営調整を行う。ここで運営調整とは、ネットワークの運営に関して共有するべきルール、通信プロトコル（通信制御手順）や管理方針を決めることを初めとする、インターネットが健全に機能するための関係者間での活動のことである。

通信プロトコル標準の策定においては、インターネットの技術者なら誰もが知っているスローガンがある。We reject:

kings, presidents and voting, we believe in: rough consensus and running code というものがある。後半のくだりは有名で、インターネット技術者なら誰でも知っている。投票ではなくコンセンサスで決めること、提案の際に実装プログラム例の添付を求め、実践的な標準の制定を目指すこと、である。しかし本稿ではあまり関心を集めない前半に着目したい。王様や大統領のような権威であろうが、第三者が作ったものは認めないし、票の貸し借りのような政治も真っ平だ、という意味である。

これを私なりに解釈して「当事者自前主義」のルール策定、という言葉で表現している。他の誰かが決めたルールではなく、自分たちのルールでインターネットを動かす、ということである。プロトコル策定以外にも、電話で言えば電話番号に当たるIPアドレスやドメイン名といった識別子の管理にも、この「当事者自前主義」は適用されている。

私の勤めているJPNIC（ジェイピーニック、一般社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター）は、日本国内で使われるIPアドレスの管理を行っている。有限の資源であるIPアドレスをどう分配するか。分配方針は、JPNICが決められているのではなく、オープン、包摂的、ボトムアップを旨として、IPアドレスの利用者であるISPの技術者などを含むコミュニティのコンセンサスに基づいた策定に委ねている。JPNICの上位にはアジア太平洋地域を管轄するAPNIC（Asia Pacific Network Information Centre）という団体があり、世界全体の総元締めとしては、ドメイン名を含めた全ての識別子を取り仕

切るICANN（Internet Corporation for Assigned Names and Numbers）という団体がある。私はAPNICの理事会議長を13年間務めた後、2016年からICANNの理事を拝命している。JPNICと同じようにAPNIC、ICANNでも、オープン、包摂的、ボトムアップなコミュニケーションプロセスが方針を定め、それに従って識別子資源を管理している。

ときどき、JPNICがIPアドレスを管理する上の根拠を尋ねられることがある。大抵、法的根拠があったり、政府の外郭団体であったり、という答えが期待されるようだが、JPNICは政府の外郭団体ではないし、IPアドレスの管理に関して、日本の法律にその根拠はない。JPNICはAPNICとの契約に基づいてIPアドレスの分配を受け、その管理を行う。APNICはICANNとの契約を持っている。契約関係としてはこれが全てであり、現在、政府との関係はない。しかし、実はICANNは長らく2016年まで、米商務省との間で「インターネット識別子管理の委託」を旨とする契約を取り交わしていた。インターネットの社会基盤としての性質を考えると、公的機関がお墨付きを与えるのは自然に見えるかもしれない。しかし一方で、米国に留まらない全世界の情報社会の基盤に、米国がお墨付きを与えるという状況に関して、他の政府から大きな不満を持たれていたことも確かだった。それでは国際機関、つまり国連下部組織が監督権限を持つべきか？という議論もしばらく続いていたが、それはインターネットの「当事者自前主義」に到底適わない。インターネットの開発に一貫して出資してきた米国に

「最小限の」監督権限を持つてもらおうという考え方が、長く世界中のインターネット関係者から支持されたという形だ。

ICANNの設立は1998年である。ほんの数年前まで小さな研究ネットワークであったインターネットが、その爆発的な拡大によって直面していたいくつかの問題に対処するために、ICANNは設立された。米政府はインターネットの「当事者自前主義」をよく理解しており、ICANNの設立目的に「監督権限を当事者たちに移管する」ことも含めた。移管は当初2年後が予定されたが、契約は度々延長され、最終的には2016年まで継続された。「結局米国は監督権限を決して手放したくないのだ」という見方も存在したほどだ。好意的な見方をする、インターネットは爆発的な拡大を続け、技術的に大きな変革を余儀なくされたとともに、インターネットを取り巻く関係者（当事者）も速い速度で拡大していった。これに対応するために、技術コミュニティ、産業界、学術関係者、政府、市民社会など、あらゆる関係者を包摂する、マルチステークホルダーアプローチによる政策過程が志向された。その仕組みが作り出され、試行錯誤の中少しずつ改良され、進化した。ICANNにおいて政策過程自体の見直しを5年ごとに実施することが決められている。つまり「当事者自前主義」は、基盤の運営方針だけでなく、方針を決めるプロセスの維持改善にも適用される。このようにして、設立以来移管まで18年という年月は、インターネットの爆発的な発展に合わせて、運営調整の機構を整備し成熟させるために必要な時間だった、私はこのように考えている。

無論、ここで紹介したような運営調整だけでICT社会が動く

わけではない。情報転送技術の発達で、より大量なデータの転送が可能となり、巨大なコンピューティングリソースの活用によってAI（人工知能）が人間の知能に追いつこうとしていて、人々はこのような技術革新の恩恵を受けている。インターネットというものは、これら同士と一般の人々をつなぐとする基盤に過ぎないのだが、それが法律による根拠に頼ることなく、当事者たちの自治によって調整、運営されることで、グローバルな情報社会を支え、それが全世界のあらゆる関係者たちに、概ね受け入れられている。これが、「みんな知ってるインターネットの、誰も知らない運営の現場」である。

ちなみに、この「当事者自前主義」の機構運営は、法律で規定され税金で支弁されるのではない。ここまで述べてきた関連団体同士が交わしている民間団体間の契約で責任関係を規定して、役務提供に応じた料金を支払っている。つまり、ISPたちやドメイン名の登録管理事業者を通じて、最終的にはインターネットを利用して企業や消費者が、この機構の運営コストを支払っている。このようにして、インターネットというグローバルな、公益的な基盤の運営を、「当事者」である民間が、支えているのだ。私がこういう運営調整に専ら携わることが仕事になったことは、生徒による自治を飽くまで志向し、そして、館歌を叫びながら社会に報いることを心に描いた、修猷館での3年間が無関係だとは思えない。二木会の講演、菁莪への寄稿の機会は感無量である。母校と館友の皆様にご礼申し上げます。

伝統工芸に求められる自立と自律



大淵 和憲

(平成4年卒)

9月は私にとって天神で「博多織」の製品を展示する季節である。ギャラリースペースに手織りの織機を持ち込み、半幅帯のサンプルを織る実演を行うことも欠かせない。展示会は単に製品を見て触ってもらっただけでなく、織物にまつわるストーリーや魅力を直接お伝えすることができる場でもある。さらには、製作者である私自身も来訪者とのコミュニケーションを通して、染織の素晴らしさや楽しさを再確認したり、ニーズについて聞くことで、新たな一面を知ったりすることができる成長の機会でもある。

新たな一面を知るとは、例えばこんな場面である。件の展示会で、色鮮やかなスカーフを首に巻いた小柄な年配の女性が、数本の博多織ストールを手にとって品定めをしていた。

「この肌ざわりはシルクだね。この長さだと今の季節はちよつと暑いよ。かといつて、もつと寒くなると、もうウールを巻きたくなるのよね。だからこれはちよつと長過ぎなの。」

ごもつともである。薄手ではあったが、いずれも1メートル

60センチくらいの長さがあった。この女性にとってはもう少し短いストールだったら御眼鏡に叶うものだった。展示会での消費者の生の声は、ストレートに響いて耳が痛い、ニーズを把握できた瞬間であり、今後の製作目標への道標となる格好の材料だ。

地元福岡の伝統工芸品「博多織」に関わるようになって7年目になる。現在、「博多織手機技能修士」として、博多織の製織方法による手織りの工芸品を製作している。博多織の技術を教える「博多織デベロップメントカレッジ」の門を叩いたのはちよつど40歳の頃だったが、それまで着物を着たことも、帯を締めたこともまるで無かった。そもそも工芸という分野に身を投じている自分の姿は、いわゆる修猷生の頃には全く想像していなかった。

伝統工芸品を目の前にする機会を得たのは、広島テレビで報道記者として勤務していた時だった。その一つは広島・府中市の「府中家具」、もう一つは沖繩の「琉球紅型」である。これらに出会ってなかったら、私が博多織と関わることは恐らくなかっただろう。

1卓が数百万円もする高級な府中家具ブランドのテーブルを目の前にして、どのような言葉を使って顔出しレポートをし、社会性のあるニュース原稿を書くのか。日頃工芸品に親しんでいなかった私にとって、その家具が持つ「用の美」を記事として記述するのは至難の業だった。しかし、事件事故や行政に関

する取材で用いる言葉とは違った用語を使って記事を書くのはとにかく新鮮で楽しく、自分の言語表現の幅が広がっている実感があつた。

琉球紅型を目にしたのは、沖縄の大学生を取材した時だった。彼女は修学旅行で訪れた広島で被爆体験を聞いた後、沖縄で芸大生として平和を訴える活動に参加していた。染色場に取材に行くと、着物の反物に金網や戦闘機等をモチーフとした柄を染め抜き、平和の大切さを表現していた。その緻密な柄や鮮やかな色合いを何とかテレビカメラに収めようと、私はライトをひたすら照らし続けた。工芸品の物振りは大変だったが、その質感や手触り感をどれだけ伝えられるかというチャレンジ精神を掻き立てられる作業だった。

思うに伝統工芸品の良さを直接的に知ろうとする時、あまり難しい言葉は要らない。目で見て、手にとつて、触れてみて得られる感覚があれば、その良さはほぼ十分に伝わる。しかし、伝統工芸品の良さを他の人に伝えることほど厄介なことはない。相当に言葉や映像を駆使しないとその良さは伝えられない。私は伝統工芸に対し、このようなある種の「厄介さ」に興味を抱き、追いかけて始めた変わり者であつた。

伝統工芸品の取材では、「伝統工芸品の生産量は減少傾向に歯止めがかからず、衰退の一端をたどっている」という経済産業的視点から見た現状にも触れることが多かった。その状況を踏まえて記事の最後に来る文章は概ねいつも同じで、「若い後

継者の育成が一刻も早く求められる」といった呼びかけだった。それは報道する意義を示す上で不可欠な締め言葉ではあつたのだが、一方で「そういう自分が関わつて、力になればいいじゃないか」と自問するもう一人の自分がいた。記事の最後で他の人にその問題意識を打つ遣るかのような、一種の無責任さに似た、モヤモヤしたもどかしい思いが、どうしても拭えなかつた。

このような伝統工芸品との触れ合いを経た上で、故郷の伝統工芸品である博多織も深刻な後継者不足に陥っていることを知つたのは、県政担当記者として選挙取材をしていた頃だった。当時の与党が提唱していた「40歳定年制」に倣つた訳ではないが、40歳を機に、私は博多織の学校の門を叩いていた。博多織における後継者不足の窮状は想像以上で、学校の当時の入学制限は「概ね35歳程度」という年齢制限のみだったが、果たして私も入学を許可された。さらには福岡県外の出身者でさえ、体力と志さえあれば入門を歓迎する状況にまでなつていた。

博多織の学校では、細い絹糸から一本の堅牢な帯に仕上げるまでのプロセスを中心に、博多織ならではの染織技術について、3年間みっちりトレーニングを受けることができた。とりわけ、「総」「杼」「綜統」「振り織」といった難読漢字で表される様々な装置や機構、製織システムは、それまでの私の記者経験の自負やプライドを粉々に打ち砕くものだった。入学当初は、染織という名の広範で深遠な海にただ漂うしかなかったが、何とかがみついで漕ぎ出し、徐々に所々霧が晴れてくるかのように、織の技術も少しずつ上達してきた。

しかし、修了後求められるのは、単に染織技術を受け継ぐことだけに留まらない。大切なのは、どのように自分自身の「博多織」を展開していくかを自ら考え行動し、自立して製作し評価を受け、商品として販売していくという姿勢である。修了生の各々が、織に携わり続けることの難しさに直面し、いかにして乗り越えていくかを考えることが求められていた。

その壁を乗り越えるために私がとった行動の一つは、他の伝統工芸品産地に赴いて見聞を広め、何かしらのヒントを得るというもので、今もこのスタイルは続けている。ある産地では「国から『伝統的工芸品』の産地指定を受けることは、生命維持装置をつけられたようなものだ」という話を聞いた。伝統工芸品の産地がひとたび公的補助金を受け始めると、その支援に依存して産地として永遠に自立できない、という様を表している言葉である。

経済産業省による伝統工芸品産地の支援振興は、私の年齢とほぼ同年の45年の歳月にわたって続けられているが、生産額や従事者数は依然として減少傾向にある。産地が自立して伝統工芸品を生産し続けるために、どのような支援の在り方がより効果的なのか。私が今拠り所としている立場は「職人個々の自律なくして、産地としての自立は成し得ない」というものである。産地の中で自律的に製作を行う姿とはどのようなものなのか。ひたすらに外的支援や補助金ばかりを受給しながら、自己満足に浸った状態で伝統工芸品の製作を続けることが目指すべき姿ではないはずである。自分なりの理想のビジョンを絶えず描き、

展示会や他産地見学などの機会でもそのビジョンを相手に聞いてもらい、その反応に耳を傾ける。伝統工芸に携わり続けることの意義を自他に問い続ける姿勢がなければ、自律的に伝統工芸品を作り続けているとは言えないと私は考えている。

令和になって初めての展示会でも手織りの実演を行った。襟付きのシャツを着た感じの良い年配の男性から声をかけられた。「これが博多織ですか。帯なのですね。福岡という言葉の手話は帯で表すんですよ。」

初耳だった。手話では、少し曲げた右手の指先を下にして、お腹の左側から右へ動かすことで「福岡」を表し、他ならぬ博多織の帯から来たイメージを表現した言葉だという。この手話の「福岡」という言葉において、帯に託された意味性の役割はとても大きい。その意味性を表す実体としての博多織の帯がなくなってしまうと、言葉の真意は消失し、形骸化した言葉になってしまうだろう。産地としての自立や職人としての自立は、ひいては郷土を表す言葉の自立にも連環していると思いついた。今後も自らの製織技術の向上に努めて自律的な製作を進めつつ、展示会の来訪者に織の素晴らしさを伝えながら、情熱と志を持って伝統工芸に携わっていききたい。

すべては「人」なり



前川 由希子

(平成9年生)

「企業は人なり」。企業に限らず、大小に関わらず組織の継続的な成長・発展のために、「人」は重要です。ビジネスの要諦が「ヒト・モノ・カネ・情報」だった時代から「ヒト・ヒト・ヒト」と言われる時代へ。そして、労働人口の減少や高齢化の加速から多くの業界で人材難が叫ばれる時代となりました。新卒採用に関するアンケート調査によると、採用計画数の達成状況は、計画に届かないという回答が33%を占め、採用難の影響が見られます。また、前年より売り手市場（学生側が有利）と感じている企業は81・7%で、3年連続で8割以上となっています。

「人は財産である」という考えが定着し、各組織がさまざまな取り組みを講じているなか、私は、企業研修や講演を通じて、ポテンシャルと可能性を持つ「人材」をより価値を生み出すことのできる「人材」という財産に育て、豊かなコミュニケーションと円滑な人間関係構築によりチーム力を上げ、組織を活性化し、業績アップや離職ストップ、ビジョンの実現を図る「組織活性化コンサルタント」を生業としています。旅好きな私にとつ

て趣味と実益を兼ねている！とも言えますが、全国を移動しながら、企業や団体で年間150回程登壇させていただく日々です。より良い人材が採用できれば、社会情勢が変われば、こんな商品・サービスがあれば……。経営者やマネジメント担当者の願望は尽きませんが、理想の状況が整うことはまず絶対にあり得ないでしょう。そこで、今いる人材を大切にしながら円滑なコミュニケーションをとり、信頼関係を築く。人材を人財に育てる。「今いる人材で最強のチームをつくる」ことが、企業存続と発展のためには必要不可欠である、と考えています。

インターネットやスマホの普及が進み、情報過多とも言える現代において、コミュニケーション手段の高度化により、面と向かって相手と言葉を交わすというコミュニケーションの場が減少し、コミュニケーション不足が慢性化しています。その一方、コミュニケーション能力はかつてないほどに重要視されているという現実があります。経団連の「2018年度新卒採用に関するアンケート調査」によると、82・4%の企業が新卒者に求める能力として「コミュニケーション能力」を挙げており、全20項目の中で、16年連続で第一位に選ばれています。また、第二位の「主体性」は10年連続です。

私が今の仕事をするに至る経緯は、約10年前に始まります。出席した結婚披露宴で司会者を見て「『おめでとう』と連呼する幸せな仕事をしてみたい」と思ったことがきっかけです。就職超水戸期で懸命に就職活動をして内定獲得が難しく、やりたい仕事以前に入社できる会社を探す傾向が強かった時代に大

学を卒業した私が、初めて、生活のためではなく純粋に「やってみよう」という仕事に出会った瞬間でした。数多くの人生最良の日に立ち会い、特別な一日を演出するお手伝いをする仕事はやりがいがありました。この時期に、相手の想いや希望を汲み取り、寄り添い、共に良いものを創造するというコミュニケーションの本質に気づくことができました。披露宴やイベント等の司会者しながら、専門学校講師や社員研修を請け負う数年間を経て、約6年前に、講師業・コンサルティング業へ主軸を移しました。とあるコンサルタントの方、講師の方と出会い、ビジネスパートナーとして期待をしていたとき、その期待に応えたい一心での転換でした。思った以上の期待をかけられたこと、その期待に応える決心をしたことが私の人生を大きく動かしたとも言えます。「チャンスの神様は前髪しかない」。通り過ぎた後で、実はチャンスだったと気づいても、時すでに遅し。チャンスかもしれない、と思つたらとにかく掴むしかない。でも、チャンスはピンチのふりをしてやってくるかもしれないし、チャンスの神様の目の前には大きな「障害」という壁があつて、チャンスであることに気づけないかもしれない。チャンスを逃さないためには、常に主体的にチャンスを掴む準備をしていること、変化や動きに敏感でいるために視野を広げること、壁を恐れないことがポイントなのではないか、と感じます。

現代の特に若い世代は、生まれた頃から携帯電話が普通に存在した世代です。SNSを使いこなし、欲しい情報を自由に取得することができ、バブル崩壊以前の景気の良さを知らない代

わりに、大震災や水害などの天災を経験しています。ゆとり世代を超えて、悟り世代と呼ばれ、絶対評価ではなく絶対評価で育ってきました。仕事のやりがい以上に自分の存在が認められる「快適さ・居心地の良さ」、価値観への「共感」と、理解し受け入れてもらえる「安心感」を重要視する傾向にあります。そんな世代や、その世代をマネジメントする方々と講師・コンサルタントとして関わる上で、いくつか留意している点があります。まず一つは、楽しくあること。本来、知らないことを知る、わからないことがわかる、できないことができるようになる、ということとは楽しいことであるはずなのに関わらず、研修や講演という場を避けがちだったり消極的な姿勢で臨む方は少なくありません。これはとても残念なことです。学びへの本質が失われているように感じます。人は、楽しいことには前のめりに主体的に集中します。より探求しようとします。「楽しい!」「面白い!」と感じることができ、主体的な関わりにつながる雰囲気づくりや仕掛けにより、学ぶ楽しみの再認識を第一に考えています。

次に、体感型であること。老子は「聞いたことは忘れる。見たことは覚える。やったことは分かる」といったそうです。これを数字で表したアメリカの研究者によると、聞いたことは10%、見たことは15%、聞いて見たときは20%、話し合ったときは40%、体験したときは80%、そして、教えたときは90%が記憶に残るそうです。楽しみつつ納得感を高め、自発性・主体性を促すワークショップやディスカッションを用いた体感型の

研修・講演にすることで、その時間だけではない、その後も記憶や行動として定着することを図っています。

そして、三つ目は、「あり方」を大切にすることです。例えば、コミュニケーション研修というと、つい話し方や聴き方などのスキルの習得、「やり方」に意識が向きがちです。しかし、「もっとわかりたい」「知りたい」「共有したい」という「あり方」があれば、「やり方」は自然とついてくるものです。人として、組織として、どうしたいのか、どうありたいのか。何をどんな価値を提供できるのか。そのことを再認識し、当たり前前のごを当たり前以上に、簡単なことを誰もできないくらい徹底して意識的に実践する。「すべては人」であるからこそ、大切にしたい点です。関わり方次第で表情が変わり、組織の雰囲気が変わり、成果につながる様子は何よりの喜びです。

私の職業は、形のないものをつくる仕事です。時に、手に触れることのできる仕事や地図に残る仕事を羨ましく感じることもあります。形がなく、伝わりづらい仕事だからこそ、発信することを意識しています。どんなことをしているのか、どんな出来事があったのか、何を考えているのか。記録であり、PRです。

PR（パブリック・リレーションズ）とは、決して営業や売り込みではありません。私を知ってもらい、時に双方向コミュニケーションをとり、世間との関係性を強化していくことだと考えています。ブログやSNSが普及して誰でも活用できる時代だからこそできることもありますし、情報の有無が信用度にも関わるからこそ、自ら発信していくことの必要性を感じています。

発信することによって任されるようになった新たな役割もあります。その一つが、「日経woman（タロスウーマン）公式アンバサダー」です。女性の就業率は約7割。女性活躍が叫ばれ、求められるなか、すべての働く女性が自由に、何もあきらめない生き方ができる世の中を実現するために立ち上げられたプロジェクトです。様々な職業の20〜50代の働く女性の皆さんとともに、自分の想いや考え、世の中で起きていることへの感想や自分なりの捉え方を発信していくというこのプロジェクトに関わり、他のアンバサダーの方々から刺激を受けたり、自分の思考整理をするいい機会となったり、ありがたく活動させていただいています。

近年、様々な場面で、人とのご縁や巡り合わせに驚いたり感謝したりすることが増えました。2017年4月の初出版の際にも、修猷館の同期や諸先輩方の応援も多かったです、そのあたりがたもと「修猷館の絆」を改めて実感しました。同窓ということでチャンスをお願いしたことも一度や二度ではありません。2019年に入り、某先輩のお声でコメントーターとしてテレビ出演させていただいたことは一つの転機にもなりました。近頃、在学中から何度も耳にした「修猷を誇るのではなく、修猷が誇る人間になれ」という言葉がずっしりと思ひ出されるようになりました。壮大な夢ではありますが、すべてに感謝をすること、「あり方」を大切にすること、社会に貢献することで一歩一歩近づければと思います。

キャリアセミナーを終えて

館歌は社会人の猷しるべ



田中 大一郎

(平成2年卒)

1. はじめに

キャリアセミナー（CS）は、平成二年卒の私達が現役生の時にはなかった正規授業。総会幹事学年のOBが現役生に自らのキャリアを語り、現役生が「これからの人生をどのように生きていくか」を考える際の一助とする講座である。そのラインナップ、なんと四十講座！大運動会、大文化祭、大同窓会、大OBゴルフ大会だけでなく、大キャリアセミナーも、先輩方は役割を果たし、伝統を受け継いでこられた。

私達卒会が幹事学年を務めた令和元年度の総会のテーマは「THANK YOU 修猷 大館謝祭」。今までに受けた幾多の恩に感謝し、恩返しするとともに、後輩に恩を送る。その想いはCSも全く同じで、学び舎で受けた恩を現役生に送るイベントとして位置づけた。CS部会の部長は南谷敦子さん、副部

会長は松永優美さん。息の合う二人が終始部会をリードし、その脇をCS部会メンバー、CS当日のスタッフ、講師が固めた。まず南谷部会長が着手したのは講師の人選。受けてもらえるかという不安を抱えながら、講師を打診したところ、「やるよ！」と応じてくれた同志、なんと約八十名！今度は一転、どのように四十講座に絞り込めばいいか、新たな悩みを抱えることとなった。学校側にも相談し、男女比、文系・理系比、業種のバランス等を勘案して、三十九講座の開設に落ち着いた。それ以降も、現役生に配布する講師一覧の取りまとめ、教室・講師・備品のマッチングや手配、学校との調整、講師の各種サポート、CS当日の運営体制の検討など、着実に準備を進め、令和初のCSを迎えることとなった。

2. 一講師として最初に考えたこと

私は高校卒業後、北海道大学に進学し、福岡に戻って西鉄に入社した。長い間バス部門に属したが、今は一般管理部門で、運輸・建物・食品の安全マネジメントに微力を尽くしている。まず、私が一講師として何を目指したのか、綴ってみたい。一生に一度の幹事学年。母校に恩返しができる数少ない機会だと、CS講師を買って出た。塾講師の経験があるので、講座の組み立てや人前で話すことには何の抵抗もなかったが、悩ましいのは「何を伝えるか」。職業への知的好奇心には応えるとして、華々しい業績も、人を唸らせるような経験も、人徳も持ち合わせていない私は、現役生から預かる貴重なひとときに、

何か有意義な気付きの一つでも贈れるだろうか。

現役生が、一番身近な社会人の親ではなく、三十年ほど前の卒業生に期待しているのは何か、想像してみた。自分と同じ場所で学び、同じ館歌を歌った「共通の起点」を持つ先輩。その「共通の起点」からの先輩の猷（キャリア）を辿ることで、「今は臆げに映る、自分のこれから進むべき猷」のヒントを得たい、そんな期待はあり得る。私の起点、高校時代は、自分のことばかり考えていて周囲には無関心、不完全燃焼の青春で、全く参考にはならないが、大学や社会人を経て、今は少しばかり「まとも」になった気がするし、日々楽しい。この辺りの自分の変化は、何かのヒントになるかもしれない。

そこでひらめいたキーワードが「役に立つ」。後述するが、大学時代のバイトの塾講師で初めて生徒の「役に立つ」ことを意識し、そこに喜びを感じた。ここが社会人の原点。西鉄入社後は、バスのステークホルダーの「役に立つ」よう努めてきたし、以前は全く関わっていなかった同窓会活動にも、何か「役に立てれば」と参加し、力不足ながら実行委員会の事務局長を務めさせてもらった。もし高校時代に「役に立つ」ことを意識できていたら、運動会・文化祭・部活など、自分が「役に立てる」ステージはいくらでもあったのだから、青春を完全燃焼できたかもしれない。自分にはできなかった、その後悔を起点に、その後「役に立つ」。「皇国の為に 世の為に」という物差しを得て、今に至る自分のキャリアを語ろう。よし、これで現役生と私が繋がった！

そんな思いを込め、私の講座のタイトルは「高校時代は不完全燃焼、でも大学時代に人気No1塾講師を目指したり、西鉄でまちづ

くり・交通に携わっている内に、館歌が腑に落ちた、一卒業生の物語」となった。

3. 社会人とは？社会人になる前の備えとは？

私の講座に集った現役生は二十八名。もつとも時間を割いたのは、「社会人とは？」「社会人になる前の備えとは？」という、現役生への問いであった。まず最初に「その答は館歌の中にある」と示唆、館歌を合唱してから、「社会人と学生の違い」についてグループ討議を行った。多くの班は、社会人を「経済的に自立している存在」と定義した。その通り。では、何故学生は稼げず、社会人は稼げるのか。私はこう定義した。「学生は【自分のために】学ぶ、だからお金をいだけない」「社会人は【他人のために】働き、社会（世の中）の課題（困りごと）を解決できるからこそ、お金をいだける」。自分のためか、他人のためか、ここが決定的に違う、と。

働く⇨傍楽（はたらく）、自分のそばの人を楽にするということ。バスの乗務員は、お客さまの「歩く」と時間がかかる、きつかー」という課題を解決して運賃を頂き、その一部が給料となる。そんな社会の「役に立つ」人⇨社会人が集まり、社会の課題を解決しているところが会社。「役に立つ」会社が重宝され、生き残る。西鉄も「まちづくり・交通」の事業を通じて課題を解決し、何かしら福岡の発展に貢献している、と思われてきたから、百十年間生き残れたのだろう。現役生の皆さんは、誰かの「役に立って」いるだろうか？まだという方、修猷には「役に立てる」場がいくらかもあるのだから、今後誰かの「役に立ち」、自分を磨けばいい。

世の中には「役に立つ」会社や事業、仕事が無数に存在するが、どれだけ知っているだろうか。例えば誰もお世話になっている小森コーポレーションという会社、何の会社？正解は国内唯一の紙幣印刷機メーカー。我が物顔で走るバスを擁する西鉄、運輸業の営業収益はグループ全体のたった二割、残りの八割の事業は？西鉄バスの仕事、乗務員以外の仕事は？知らないことばかりだ。そして何より、自分が何をやって、どのように「役に立ちたい」のかという「志」は？世の中のこと、自分のことも分からずに、このまま社会人となって、大丈夫だろうか？でも、焦らなくていい。私は在学中にそんなことを考えたことすらなかった。今は「無知の知」を悟り、これから世の中のこととも学んでいこう。その内、「志」も立つはずだ。

4. まちづくり・交通という社会貢献

次に、「まちづくり・交通」における西鉄の社会貢献について、歴史と今後の展望を紹介した。北九州の路面電車を発祥とし、戦中の五社合併を経て、福岡の公共交通の大半を担い、天神や福岡とともに発展してきた歴史は、巷に溢れているので、この紙面では割愛する。「地域とともに歩み、ともに発展します」を標榜する西鉄は、今後の少子高齢化時代の課題解決にも挑戦する。人を呼び込み、まちを活性化する事業として、福岡空港の運営受託や施設拡充、天神ビッグバンの一つである福岡ビルの建替。持続可能なまちづくり・交通の事業として、アイランドシティセンターマークス、私も携わった連節バスの導入。福

岡のまちづくり・交通で「役に立ちたい」という「志」を立てた時は、西鉄が就職の選択肢の一つになるだろう。

私が携わった仕事の内、特に思い出深いのが、九州内の路線バス・高速バスが乗り放題となる乗車券「SUNQ(サンキューパス)」の商品開発。約四十社局のバス事業者の調整は困難を極めたが、九州まるごと、リーズナブルなバスの旅の提供で観光客を増やし、地域の活性化を図るという「志」の実現に努めた。最近では天神やキャナルシティで、SUNQパス片手の外国人をよく見かけるようになったが、実に感慨深い。

講座の後半、史上初？西鉄バス「むろみ団地〜西新線」のダイヤ作成演習を行った。ダイヤの山をパズルのように組んでいく作業だったが、ここで問うたのも、そのダイヤがお客さまの「役に立つ」かを考えながら作ったか、であった。

5. 自ら志を掲げ、実践するということ

クロージングは、「志」に焦点を当てた。

夏はバイクのツーリング、冬はスキーと、北海道での大学生活を謳歌していた私は、その軍資金を得るべく、北大学力増進会で塾講師のバイトをしていた。ここでは、講師が講師の前で行う模擬授業や生徒の受講アンケートを通して、自分の授業に容赦のないフィードバックを受ける。もっと上手く教えたい、試行錯誤を重ねながらも、先輩講師に教えを請うた。「どうすれば上手く教えられるようになりますか？」

先輩からの答はひとこと。「愛たろ、愛っ。」そうか！合格と

いう生徒の夢を絶対に叶えるために身を捧げる、その気持ちこそが上達の秘訣。そう開眼した私は、無給にも関わらず、猛烈な予習やりハーサルを重ねた。もつと上手く教えて、生徒の「分かった」を増やし、合格させる。その「志」の実践は、今振り返ると、「皇国の為に 世の為に」「向上の路進み行き」の意識に支えられていた。「役に立つ」と、福も来る。最後の年の講習会では、理社科講師三百人中三位の表彰を受け、当時の生徒からは今も年賀状が届く。講師冥利に尽きる。

これから日本や世界の将来を担う現役生に欠かせないのが「志」。「皇国の為に 世の為に」、どのような「久遠の理想を望み」、自分はどう「役に立つ」のか。その「志」について、大河ドラマ「花燃ゆ」の中で、吉田松陰はこう語っている。「志は誰も与えてくれません。君自身が見つけ、それを掲げるしかない」。今から悩み、考え抜き、自分自身で見つけて、掲げ、実践することを期待している。その「志」の立て方や実践の中で、自分らしさは発揮されるのだ。そして、掲げた「志」を實現できそうな会社を「自ら選ぶ」のが就職活動。自分が選ばれるのではない、選ぶのだ。

最後の問いかけは「では今日から貴方は何をしますか」。話を聞いただけで終わるのか、それとも今日の気付きから何かを始め、備えてから社会人を迎えるのか。そこが問われている。

6. キャリアセミナーとは？

受講後に現役生がびっしりと書き込んだアンケートを一部紹

介したい。賢い現役生は、私の思いを汲んでくれた。

・ 今回の講義で、自分に「志」と呼べるようなものがないことに気づき、危機感を覚えました。

・ 最後に、自分がどう役に立つかを考えて、という質問がありました。正直、今までそんなこと考えたことがなく、ハッとさせられました。

・ 普段は何気なく歌っている館歌の歌詞の中に「社会人となる前の備え」にびつたりとあっていることを知って、館歌をもっと大事にしてみようと思えました。

現役生にとって社会人は未知の世界。「働くのは大変で苦しくて辛いこと」「自分らしさを発揮できる仕事に就けるだろうか」、そんなネガティブな感情や漠然とした不安を抱えているかもしれない。「優れた業績や地位、名声を残せそうもない」と、諦めモードに入っているかもしれない。でも、そうじゃない。「皇国の為に 世の為に」という心がけ一つで、どんな小さなことでも、困りごとを解決する度に、喜びや幸せを感じることが出来る。そして、もつと「役に立つ」ため、「世の中を良くする」ため、現状をどのように改善すればいいのかという「向上の路」を意識すると、仕事は格段に面白くなる。

三十九名の講師の様々な思いを込めた講座から、希望ある社会人の姿や愛に支えられた社会の一隅、そこに至る猷を現役生が確かめられたのであれば、僅かではあるが、「吾等が使命を果たし」とと言えるだろう。そして、CS部会メンバーや当日スタッフは講師のために、講師は現役生のために、「至誠」をもって践み修めた猷を引き継いだのであれば、本懐である。

修猷館柔道倶楽部の活動と記念史

中原 一
(昭和45年卒)

修猷館柔道倶楽部とは、修猷館柔道部のOB・OG会のこと
で、柔道部OB・OG会としての活動、及び柔道部の指導者と
現役部員に対して物心両面の援助を目的とした会です。現在は、
藤野善剛(昭和36年卒)会長、奥田貫介(昭和62年卒)幹事長
を中心として、「修猷館柔道部」星の光125周年「記念号」
の編集に向けて活動をしているところです。そこで、本誌をお
借りして、125周年記念史の情宣と倶楽部の活動状況を紹介
させていただきます。

修猷館柔道倶楽部は、明治28年(1895)に在校生全体の
体育組織となる性格の同窓会が創設され、柔道、剣道、陸上、
野球の4部が誕生し、その中でも柔道、剣道の両部のいずれか
に、全生徒がはいなければならない時代がそうです。

このような内容を含め、平成7年(1995)に「修猷館柔
道部百年史」を編纂しております。それまで、創立50周年が昭

和20年(1945)の戦後の混乱期であったこと、武道だった
柔道がGHQの占領政策により、教育や体育行事一般から追放
されていたこともあり50周年記念史、それに続くべき70周年記
念史を作る機会を逸した旨の記述があります。そこで、先の反
省を踏まえ、125周年記念史を四半世紀ごとの区切りとして、
制作をすることになりました。この記念史は100周年記念史
を編集された山田龍蹊(昭和19年卒)先輩、及び奥田幹事長に
編集をお願いし、

- ①あなたにとって、最も忘れ難い修猷館柔道部時代の思い出、
いまも心の糧になっていること。
 - ②修猷館柔道部が最も大事にすべき柔道の原点、真髄。
 - ③これからの修猷館柔道部への檄。アドバイス。
- の3つの内容をコンセプトに倶楽部会員有志から原稿を集め編
集し、令和2年2月に発刊の予定です。

そこで、伝統ある修猷館柔道倶楽部の活動状況も、記念史に
大きく関係することなので、紹介したいと思います。昭和45年に
卒業してから、50年あまり、かかわってきましたが、熱心な修猷
館柔道部指導者に恵まれ、毎年同じ様な活動をしてまいりました
ので、平成30年度4月期から1年間を追いながら紹介いたします。
現役部員の活動を中心に、担当の先生(現在は藤原先生)の指導
方針や教育に合わせて、援助することを心掛けております。

4月期の「新入生歓迎会」からスタートいたします。今春は、
男子4名、女子9名の新入生が入部しております。ここ数年、
女子の部員のほうが圧倒的に多く、1年生から3年生までが3

対7くらい割合になっております。そこで女子生徒のために、担当の藤原先生の奥様（柔道の専門家）にもお手伝いいただき、夫婦で教育指導をしていただいております。倶楽部からは、有志の参加で焼肉会を催します。

7月の「選手激励会」は、金鷲旗大会に出場する男子、女子の激励会を倶楽部有志、生徒の御父母で行います。

7月下旬、金鷲旗柔道大会の最終日に「修猷館柔道倶楽部総会」及び生徒の試合の慰労を兼ねて行います。もちろん生徒全員と先生ご夫妻を御招待して、日頃の労をねぎらい感謝申し上げます。3年生は、受験準備のため引退し、志望校などの発表をして、2年生は、次期主将から来年度の抱負を発表します。

12月は、30日に「餅つき」を行います。興味のある生徒や餅つきの経験のない生徒を中心に自由参加、倶楽部有志、御父母の参加で持ち寄った食品でBBQなどを行います。

1月2日に「稽古始め」として、帰省している倶楽部の会員、全柔道部員で初稽古を行い、暮れについた餅を使って、新年のご挨拶と御父母の皆さんに作っていただいた、ぜんざいをいただきます。夜には、「新年会」が開かれ、倶楽部有志と先生で行います。このような援助のほかに、生徒の春、夏、冬の合宿の資金補助、春の遠征資金補助などを行っております。なお、試合の結果などは、メーリングリストにて、藤原先生から、倶楽部会員に随時情報を提供していただいております。

先日、倶楽部有志で、瀬戸裕次郎君（平成30年卒・現福教大2年生）の祝勝会及び激励会を行いました。彼は、全日本視聴覚者

柔道大会で66kg級初優勝を飾り、現在各種国際大会で勝利ポイントを取得中です。来年度の東京パラリンピック出場の最有力候補と言われております。ぜひ修猷館同窓会の皆様の応援をよろしくお願いします。

最後に、倶楽部会員の会費や寄付金から資金援助を行うことなのですが、18歳～65歳までが会員として年会費を、65歳以上の会員は、寄付金としていただいております。

30年度の納入者は、年会費をいただいた方が28名、65歳以上の寄付金の方が49名でした。18歳から65歳までの会費納入者が年々減っていることを心配しております。できるだけ多くの倶楽部会員が参加できますように、他の課外活動のOB・OG会の皆様のご教示があれば幸いに思います。



大正9年 第1回全国大会優勝

花盛り同窓会

令和元年度 同窓会総会報告

THANK YOU 修猷 大館謝祭



同窓会総会 幹事

三戸 宗一郎
(平成2年卒 卒猷会)

令和最初の同窓会総会の幹事を務めさせていただいた、卒猷会(平成2卒)実行委員長の三戸です。

まずは総会やゴルフ大会へのご参加、キャラバンや激励会、チケットの購入や新聞広告へのご出稿、運営への助言等々、様々なご支援を賜り、まことにありがとうございました。昔も今も、私達が同窓会の皆様から大きな恩をいただいている、というのを実感した一年でした。

今年の総会は、令和元年5月25日土曜日、ホテルオークラにて開催し、1300人を超える館友が集いました。私達は総会のテーマを「THANK YOU 修猷 大館謝祭」に定め、今までにいただいた数々の恩に感謝しつつ、少しでも恩返しができるよう、また後に続く世代に恩を送れるよう、幹事学年と

しての活動を進めてまいりました。

大文化祭、大運動会に続けとばかりに、神輿を準備して「祭」を盛り上げ、今年卒業したばかり、平成31年卒のダンスユニット「いささか46」のパフォーマンスが華を添えました。会場に映し出された映像では、「祭」にちなんで、昨年の大文化祭、大運動会が紹介されたほか、天明から令和に至る235年の歴史を振り返り、その語り部でもある赤煉瓦の解体の様子も映し出されました。また、卒猷会メンバーで熟議を重ねて製作したグッズの数々をお届けしたほか、取り壊された赤煉瓦が今後とも館友を見守り続けてくれるよう、お土産の「ホシノカケラ」に作り上げました。そして、千名を超える館友の皆様が楽しいひとときを過ごせるよう、卒猷会186名のメンバーがそれぞれの持ち場で、慣れないホストを務めさせていただきました。

総会後の6月2日曜日、青空の下、福岡カンツリー倶楽部和臼コースにて、過去最高となる182名が集うOBゴルフ大会を開催しました。総会・ゴルフ大会とも、行き届かない点多々あったかと思いますが、祭に免じて、ご容赦いただければと存じます。

総会前日には、私達が現役生の時にはなかったキャリアセミナーを開催しました。39名の講師が自らのキャリアを現役生に熱く語り、漠然としているであろう社会人生活に光を当て、働くことの意義や喜び等を伝えました。今までに私達がいただいた恩を、少しばかりは現役生に送れたのではないかと感じていきます。

この一年間を振り返ってみると、何と言っても一番に感じたのは、館友の絆でした。全国各地、様々な世代の館友と交流し、激励され、修猷館という御旗の縦糸の太さ・強さを幾度となく実感しました。中でも印象的だったのが、150名超が集っていた還暦同窓会（昭和52卒）。ベリリダンスを囲み、和気藹々と還暦を迎えられている姿に感激し、卒猷会もかくありたい、と強く感じた次第です。

また、様々な準備活動やイベントを通じて、同期の横糸が太く、強くなっていく様も、心強い限りでした。毎月開催した全体会議、キャラバン、花見、BBQ、レンガ部会の活動など、数え上げればキリがありませんが、九つの部会が自律的に役割を果たし、連携しながら、楽しくホスト役を務め上げたことで、さらに絆が深まったと確信しています。総会には186名の同期が集まりましたが、来年正月の卒業30周年同窓会は、これを上回る同期が集い、祝杯を挙げたいと願っています。

恩師との再会も懐かしい限りでした。卒業して三十年近くを経ても、未だに私達を見守り、元気なお姿を見せていただいたことに、深く感謝しています。

昨年5月に、修猷館の歴史と伝統という神輿をガンガン会の先輩方から引き継いでから一年。私達は235番目の曳き手として突っ走り、無事に讃猷会へと引き継ぐことができました。これedyouやく、修猷人脈の末席に加えていただいたというか、修猷元服の儀が終わった気がします。これからも、大切な先輩・後輩・同期との絆をさらに深めていききたいと切望しております

ので、宜しくお願ひします。

最後に、「レンガの世代」卒猷会よりトリビアを一つ。赤煉瓦の壁はコンクリートの壁に一新されましたが、そこにはめ込まれている多数のタイルの内、一枚だけ、本物の赤煉瓦にしていたきました。今度修猷館を訪れる際は、是非探してみてください。

本当にこの一年間ありがとうございました。館謝！



令和元年度 修猷館同窓会総会

令和元年度 東京修猷会 総会報告



実行委員長

渡邊 智彦

(平成5年卒 G O猷会)

令和元年度東京修猷会総会は、同年6月7日(金)にハイアットトリージェンシー東京にて盛大に開催されました。当日はあいにくの雨にもかかわらず、616名もの館友の皆様にご参加を頂きました。

新しい時代、令和を迎えた最初の総会では、皆様が「修猷の輪」の中で新たな出会いや想いを創出して頂けるよう、『新時代』つなGO 修猷の輪 ―始める 深める 修猷活―をテーマに掲げ取り組んで参りました。

映像企画、『新時代』つなGO六光星リレー280里行軍』では、六光星を描いた封筒や旗をバトン替わりに、日本全国の館友から寄せられた映像をリレー形式に繋ぎ披露させて頂きました。修猷館内から総会会場までの280里を全国480名もの館友が、六光星にのせて繋ぎ届けたもの、それは、地域や時代を超えた修猷への熱い想いでした。20分にもわたる映像リレーに対し、会場の皆様が最初から最後までスクリーンに熱い視線を送り、フィナーレで大変大きな喝采を送って頂いた際は、「修猷の輪」が会場を越えて一つに繋がったことを心から感じた瞬間でした。

また、今回の総会では当日の会場の様子を写真撮影し、会の最後に映像化して上映致しました。スクリーンに映し出された皆様の笑顔は、我々GO猷会にとつて、何にも代え難い宝物となりました。皆様のたくさん笑顔に包まれながら、総会は無事に幕を下ろしました。

二年間に亘る準備期間を振り返り強く感じたことは、全ての館友が心の深いところで修猷館のことを大切に思っている、ということでした。

準備の過程で起こる様々な課題に対して、個々の才能を結集して乗り越えていくGO猷会の同期達。また、そんな我々を温かく支えて下さった、朋猷会(平成4年卒)を始めとする諸先輩方、東京修猷会執行部の皆様。そして、映像企画にご協力頂いた全国各地の館友の皆様。皆様に「修猷の輪」を感じて頂きたく取り組んできたはずの我々が、逆に皆様から「修猷の輪」を感じさせて頂きました。

我々GO猷会は、東京修猷会総会幹事学年としての活動は幕を下ろしましたが、皆様から受け取ったこの「修猷活」はまさに始まったばかり。今後も皆様と一緒に歩み続け、修猷館への想いを深めて参りたいと思います。

本年の東京修猷会総会は、六星会(平成6年卒)が幹事学年

を務め、令和2年6月12日（金）に、ハイアットトリージェンシー東京にて開催される予定となっております。皆様と東京修猷会総会でお逢いできることを今から心待ちにしております。



近畿修猷会2019年 年度幹事を終えて



近畿修猷会 睦会

廣津 聖子

(昭和63年卒)

2019年11月2日（土）に令和初となる第44回近畿修猷会総会・懇親会を終えて、1年に亘る年度幹事を無事に終えることができ、ホッとしている今日この頃ですが、近畿修猷会の常任幹事を務めさせていただくことになったので今後も同窓会活動に深く関わっていくことになりそうです。

年度幹事をきっかけに定期的に集まるようになったという話を先輩方からよく聞きますが、近畿の睦会は10年ほど前からよく集まっていたので、2017年の福岡同窓会総会の直前に近畿の代表を誰にするかという話になり、代表 森敏浩、副として坂元、廣津で活動していくということが決定し、2次会で同級生の前で挨拶をしました。

2018年11月10日（土）の第43回近畿修猷会総会・懇親会で昨年度の年度幹事である無二の会より「修猷の職」を引き継ぎ、年度幹事の活動がいよいよスタートしました。

毎年12月の忘年会で翌年の年度テーマを披露するのが慣例となっております。我々の年度テーマは「絆 修猷く時代と世代を

超えて」。我々が昭和最後の卒業生であり、幹事年に平成から令和へ元号が変わることに因縁を感じ、このテーマに決定しました。同窓会活動を年度幹事の我々も楽しみながら、世代を超えてたくさんの方に参加していただき楽しんでもらいたいという願いを込めました。

そして年が明け本番の2019年がスタート。最初の行事である合同幹事会・新年会を1月19日(土)にホテル モントレラ・スール大阪で開催しました。この会には51名が参加し、年間活動計画、年度幹事メンバー紹介、総会および春&秋イベント紹介、クラブ活動予定報告が行われました。

春新聞(3月23日発送)では、荻原幹事長に「近畿修猷会の更なる発展を目指して」と題して組織の活性化の要素、組織改革、特に会員管理システムの導入、幹事の若返りによる活性化についてご寄稿いただきました。また、私が2018年9月に開催された平成最後の修猷大運動会取材したので、その記事を書かせていただきました。

春イベント(5月11日)では、「時代と世代を超えて」の年度テーマにちなんだ企画として、我々睦会の早生まれの生年である昭和45年に開催された大阪万博のパビリオン、昭和のレガシー「太陽の塔」を令和の幕開けに訪ねました。爽やかな青空の下、昭和32年卒の大先輩から最年少は6歳まで66名の幅広い世代の皆様が集い、太陽の塔の内部見学をして、その後日本一の大観覧車組とエキスポ70パビリオン見学組に分かれてそれぞれ満喫し、「ホテル阪急エキスポパーク」で再び合流して昼食

を楽しみました。

秋イベント(9月21日)は、睦会に比叡山延暦寺一山戒光院住職高山良彦君がいるので比叡山延暦寺東塔・西塔・横川の三塔を任職自らのガイド付きで参拝しよう!という企画で総勢82名、京都駅から2台のバスに分乗して比叡山延暦寺を訪ねました。東塔を散策後、延暦寺会館で昼食を取りました。晴れていれば琵琶湖が一望できるレストランなのですが、当日は霧が濃く時々小雨が降るという天候でしたので、残念ながらも見えませんでしたが、散策中は幻想的な感じがして、これはこれでもいい思い出になりました。昼食後、東塔満喫コースで東塔に留まる方と西塔を訪ねるコースに分かれ、再度横川で合流して色々と任職のお話を聞き、最後横川の駐車場で館歌斉唱し京都駅で解散となりました。

秋新聞(9月28日発送)では、高校のグラウンドが人工芝化されると聞いたので「令和の修猷を訪ねる」のテーマで7月に修猷館同窓会および高校を訪問して取材させていただきました。歴史をからめながら記事を書かせていただきました。また私は薬剤師をしているので、「お薬手帳を活用しましょう」と薬剤師として思っていることを書かせていただきました。

そして1年間の幹事活動のフィナーレである第44回近畿修猷会総会・懇親会が11月2日(土)にヴィアーレ大阪で開催されました。総会に先立ち、特別講演として睦会の西島和彦君(ユースシアタージャパン劇団運営委員長)に「世界に広がる『ユースシアター』の活動とは」と題して講演頂きました。総会では

音楽を楽しむ会のピアノ伴奏による館歌斉唱に続いて、修猷館高校館長 高島孝一様、修猷館同窓会会長 川崎隆生様から来賓のご挨拶をいただき、続いて事業報告、決算報告、役員改選が行われ役員の交代が承認されました。また来年度の事業運営方針及び収支予算が承認されました。

懇親会では、芦原直哉次期会長からご挨拶をいただき、新役員の紹介が行われました。また今回退任された役員の方々に感謝の意を込めて花束が贈呈されました。引き続き東京修猷会副会長 等健次様、関西福中・福高同窓会会長 岡部和也様からご来賓を代表してご挨拶をいただき、昭和17年卒の辰巳秀一先輩より乾杯のご発声を頂いて歓談がスタートしました。そして、恒例の各クラブ活動報告や年度幹事引き継ぎなどが行われたのち、睦会祇園義朗君のエールに続いて参加者全員で「彼の群小」を大合唱して閉会となりました。

東京修猷会の幹事から始まり福岡と続いて近畿が最後の幹事学年。大阪に東北、東京、福岡から集まり総勢52名、2次会でみんな一緒に記念撮影をした時は達成感に満ち溢れていました。そして、ガンガン会は我々よりも早い時期から準備を始めています。新体制のもと、楽しみながら1年間頑張っていられることを祈念しています。

最後に八木会長をはじめ役員の皆様、そして近畿修猷会会員の皆様、1年間至らない私ども睦会をご指導・ご支援いただきまして、心から感謝申し上げます。



〓 支部だより 〓

近畿修猷会

近畿修猷会では春に行楽イベント、秋には文化イベントとゴルフコンペ、11月に総会を公式行事として毎年実施しています。2019年度は年度幹事の睦会（昭和63年卒）の皆さんが企画から運営まで実施していただき、全てのイベントが盛大に開催されました。

春の行楽イベントは「万博・太陽の塔内部見学&日本一の大観覧車搭乗ツアー」を5月11日（土）に開催致しました。

秋の文化イベントは9月21日（土）に「館友高山良彦住職と巡る日本仏教の母山・延暦寺」を実施しました。睦会のメンバーである高山さんが延暦寺の住職をされており、山を巡りながら延暦寺に関する多くの事を直接学ぶことができました。秋のスポーツイベントである近畿修猷ゴルフコンペは10月5日（土）によりウエストコースにおいて和やかに開催致しました。

総会は11月2日（土）に本町のヴィアール大阪において盛大に開催致しました。総会に先立ち睦会の同期でユースシアタージャパンの劇団運営委員長である西島和彦さんの講演会を開催致しました。

総会では役員改選が行われ、芦原直哉（昭和45年卒）が新会長に就任致しました。また、副会長として遠座俊明（昭和52年卒）、幹事長に大竹恵（昭和51年卒）が選任されました。

連絡先 会長 芦原 直哉（昭和45年卒）

北九州修猷会

北九州修猷会は令和元年10月25日（金）に修猷館高校から高島孝一館長、同窓会本部から川崎隆生会長、西高辻信良副会長、大賀啓史常任幹事長をお迎えし、ホテルクラウンパレス小倉にて第19回北九州修猷会を開催いたしました。

2年振りの開催となる本年は、4名のご来賓、来年の同窓会幹事学年である讃猷会のキャラバン隊の皆様4名を含め、昭和26年卒から平成23年卒までの幅広い年代の67名の館友の皆様にお集まりいただきました。（一昨年は57名）

津田純嗣北九州修猷会会長（昭和44年卒）の開会挨拶でスタートした総会では、高島館長、川崎会長にご挨拶、大賀常任幹事長に同窓会の近況報告をいただきました。久しぶりに聞く在校生の活躍や修猷館の近況に皆様熱心に耳を傾けておられました。恒例の卓話では太宰府天満宮第39代宮司の西高辻副会長に「令和と太宰府」という演題でお話をいただきました。記念す

べき令和元年にゆかりの地・太宰府の歴史についてお話いただき、皆さん大変興味深く聞き入っております。

総会に引き続き、田中丸善昌先輩（昭和26年卒）の乾杯のご発声によりスタートした懇親会は、至るところで歓談の輪ができ、また讃猷会の皆様による記念グッズ販売も大盛況で2時間という時間があつという間に過ぎてしまいました。

今回の北九州修猷会は2年後の令和3年開催を予定しております。北九州修猷会は同窓会事務局より北九州とその近郊に住まいの方々をご連絡いただき、ご案内を差しあげております。

次回も多くの皆様のご参加をお待ち申しあげております。

連絡先 檀 博史（平成8年卒）



佐賀修猷会

2019年6月17日令和初となる佐賀修猷会総会が、佐賀駅前の「グラント葉隠」にて開催されました。今年は、平野教頭先生と同窓会本部より大賀幹事長を来賓としてお招きして、新執行部として初の総会となりましたが、総勢48名の参加を頂いて、盛会に開催することができました。

佐賀修猷会は、昭和60年以来35年にわたり、佐賀大学の先生方や地元金融機関、報道機関などに在籍される館友の方々を支えられ、初代会長の百崎多久市長さんを会長にいただいて以来、2代目会長として昭和28年卒業末次先輩まで脈々と続いて参りました。そして今年度より当方が3代目佐賀修猷会会長として務めさせていただきます。

今年は、昭和45年卒の後藤佐賀大学副学長先生や昭和36年卒の十時先生から、平成31年卒業の佐賀大学新入生の岡本さんまで、幅広い年代の方々の参加を頂き、大変有意義で活気ある同窓会となりました。尚、佐賀修猷会は正式な同窓会としてスタートする以前から、元々佐賀医大の先生方の集まりからスタートしておりまして、今年まで、庶先輩方のご努力をもって、県下の全員としては200人を超える会員を有して、若い世代の会員の方々と共に修猷を語る貴重な温かい交流の場となり、共に助け合う素晴らしい会合となることができました。

今後も会員皆の協力の下に、一致団結し修猷精神を伝えてい

ける力強い団結の場としていきたいと願っております。

連絡先 駒井 英基(昭和49年卒)



長崎修猷会

第46回長崎修猷会総会は、ご来賓の高島孝一館長、田中雅美事務局長(昭和50年卒)、2020年度同窓会総会幹事「讃猷会」の皆さんを含む総勢31名で、眼鏡橋近くの中国菜館「慶華園」で12月7日(土)午後4時から開催致しました。

総会前半は、長崎市立病院機構長崎みなとメディカルセンター理事長兼院長の兼松隆之氏(昭和39年卒)から『毎年医師が9千人誕生する日本でなぜ医師不足が起こるのか?』とのテーマでご講話頂き、講話を楽しみと語っていた学生幹事の中野倫太郎君(平成27年卒)等が、熱心に質問していました。

引き続き、中牟田真一会長(昭和41年卒)、高島館長、田中事務局長からご挨拶と近況報告、鶴田修氏(昭和44年卒)の長崎修猷会経過報告、参加者全員での記念撮影を行いました。

総会後の懇親会は、初参加の坂井真知子さん(昭和44年卒)から素敵なお話と笑顔を添えて乾杯のご発声を頂き、和やかに開宴ひとしきり懇談の後、初参加者、久方ぶりや遠来の参加者にご挨拶頂いた後、柴田修実行委員長以下7名の讃猷会の2020年総会案内、参加者からご提供頂いたお品、食事券、スクラッチカードなどが入った福引抽選会を行い、最後の館歌斉唱へ。

予定では中野君が指揮する筈が、讃猷会柴田委員長が突如学ラウンに着替えて登壇し、館歌斉唱を見事に指揮。見事なエールで例年になく最大の盛り上がりを見せ、中西太氏(昭和48年卒)の万

歳三唱で盛会のうちにお開きとなりました。
これからも長崎修猷会は、学生から大先輩まで幅広く交流頂
けるよう、盛り上げて参りたいと思います。

執筆者 宮下 武彦（昭和60年卒）
立石 修（昭和62年卒）
連絡先 鶴田 修（昭和44年卒）



大分修猷会

大分修猷会は昭和58年の発足以来36年が経過しました。来年（令和2年）2月15日（土）開催予定（大分市内大分センター・ホテル18・30より）の総会が37回目となります。毎回、館長先生をはじめ母校の先生方や本部同窓会の役員の方々に総会に駆けつけて頂き、母校の状況や同窓会の運営状況などをご報告頂いております。総会は、大分市内での開催と別府市内での開催を隔年ごとに繰り返しております。私自身は、36年前の本会発足当時から幹事役を務めさせて頂き、18年ほど前からは幹事兼会長として会の運営に携わっております。この間、ひたすら毎年、途切れず総会を続けることだけをモットーに会の運営をして参りました。今後も当分これが続きそうです。最近は、ありがたいことに本部同窓会の幹事学年の方々が遠路、大分までお見え頂き、本部同窓会をPRして頂き、総会を盛り上げて頂いております。

新たに大分に転居された方や総会案内が届いていない大分在住の卒業生の皆様、是非、当方にご一報ください。また、大分県外の方も参加希望の方は大歓迎です。大分修猷会総会のご案内を差し上げたいと思います。連絡は下記へ、メール等で連絡頂けると幸いです。

連絡先 大分修猷会会長 井上 正文（昭和44年卒）

熊本修猷会

「くまモン」の国の同窓会

令和最初の年次総会及び懇親会は、令和元年11月23日にアーコホテル熊本城前にて、総勢28名で開催されました。福岡からは、高島館長、川崎同窓会長並びに田中事務局長の3名のご出席を賜りました。また、本部同窓会の幹事学年である「讃猷会」から、物理部の後輩である井上嘉和君（平成3年卒）を含む6名の参加がありました。

総会では、「くまモン法被」の初の袖通しがありました。世の中に多く作り出された「ゆるキャラ」の中でも、くまモンはお子様から大人まで幅広い年齢層に人気があるキャラクターで、ゆるキャラグランプリ殿堂入りも果たしています。今回、我ら熊本修猷会もくまモン人気にあやかっ（？）て、熊本県から利用許諾をいただき、法被をリニューアルいたしました。「福岡県の公立高校なのに、何故熊本県のPRをするの？」と訊かれると少し困るのですが、そこは同じ九州人、お隣さんのよしみということで、まあ良かたいと生暖かい目で見守っていただけ

ればと思います。

今後は、さらなる会員増をめざして、修猷館とくまモンのコラボグッズ（第二弾）の製作等を検討していきたいと思っております。熊本県内在住の方で会員になっておられない方は、是非とも会員になっていただき、みんなで熊本本の復興を盛り上げていきましょう！詳しくは、以下のメールアドレスにご連絡ください。

連絡先 井上 昌治（昭和51年卒）

荒川 浩成（平成2年卒）



宮崎修猷会

文責・光田 靖（事務長・平成5年卒）

連絡先 光田 靖

平成30年度の年次総会および懇親会は平成31年1月26日（土）に開催されました。来賓として、修猷館高等学校を代表して高島館長、同窓会本部より大賀幹事長のご臨席を賜りました。また、平成31年度修猷館同窓会総会の幹事学年である「卒猷会」から4名のご参加をいただきました。総会における活動報告に引き続き懇親会では、来賓の皆様にご挨拶をいただき、現役館友達の活躍や、同窓会の近況をお聴かせいただきました。会の中程では、「卒猷会」のみならずから平成31年度同窓会総会の開催案内をしていただきました。また、東京修猷会の幹事学年である「GO猷会」からの依頼で、企画のための動画を撮影しました。宮崎弁「てげてげていっちゃが〜」の掛け声で、楽しい撮影となりました。その後も和氣藹々と懇親会は進行し、館歌斉唱をもって楽しい会も閉会となりました。

平成31年3月12日（火）には、ご昇任で離宮されるアダチ館友（昭和56卒）の送別会を行いました。アダチ館友は長年にわたって宮崎修猷会の幹事を務められ、黎明期から会の発展にご尽力をいただきました。これまでの多大なるご貢献に感謝申し上げます。また、新天地でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。宮崎修猷会は小規模な会ですが、アットホームな雰囲気集まりです。宮崎へ転入される館友の方は、是非、宮崎修猷会へご参加ください。お待ち申し上げます。

沖繩修猷会

沖繩修猷会は、九州地区最後の同窓会支部として平成17年に発足し、本年度15周年を迎えることになりました。節目となる第15回沖繩修猷会総会・懇親会を、11月16日（土曜日）に那覇市にて開催いたしました。遠方にも関わらず、同窓会本部からは、川崎隆生会長、大賀啓史幹事長、羽田野節夫幹事（沖繩修猷会会員）、修猷館高校からは高島孝一館長にお越し頂きました。東京や福岡からも多数の県外会員の方々の御参加を頂き、初冬の風物詩となりました「南の島での緩い館友交流」を深めることができました。総会では、灰渕英昭沖繩修猷会会長（昭和42年卒）から、「南部九州総体2019」沖繩会場応援活動の他、沖繩修猷会15年についてのご紹介がありました。総会幹事学年の讃猷会（平成3年卒）もお越し頂き、懇親会を盛り

上げて頂きました。高島館長からは、沖縄修猷会へオリジナル校旗（1/3）のサプライズ贈呈がありました。沖縄在住・非在住に関わりなく、「緩い」沖縄修猷会に御興味のある方、11月に沖縄旅行をご計画の方々は、是非ともご一報をお願い致します。一見さんも歓迎いたします。

沖縄修猷会 連絡先 山崎 秀雄
(昭和55年卒)



第15回 沖縄修猷会
令和元年(2019年)11月16日
那覇市・琉歌

東北修猷会

2019年12月7日仙台市内の仙台ガーデンパレスで東北修猷会第8回定期総会（設立から通算9回目）を開催しました。東北各地、福岡、東京などから26名の皆さんが参加、本部から大賀啓史常任幹事長、修猷館から井上英一郎副校長に来ていただき、それぞれ同窓会の学校へのサポート、修猷館の現状についてスピーチをしていただきました。

とりわけ、グラウンドの人工芝化については詳しく説明いただきました。

また、井上英一郎副校長から、来年の研修旅行が10月1日から3日関東地区で福島県も含まれる予定との東北修猷会にとつて嬉しいお話もありました！

今年も館歌が東北の空に流れた後、佐竹正夫先輩の乾杯の音頭で懇親会に！

懇親会では、東北大学4年山本賢君（研修旅行で研修担当）が携わった様々な被災地ボランティア活動報告をしてもらいました。

また、来年本部同窓会担当幹事の平成3年卒の皆さんの総会開催PRも。持って来ていただいたグッズもよく売れたようです！

懇親会中には、2012年本部同窓会で紹介された東北修猷会設立、第1回修猷館東北研修旅行の映像、59年卒山本文彦

さん作成の3月11日震災当日等の映像を紹介しました。以下
2019年の活動概要です。

2月 南三陸学生プロジェクト取材協力

修猷OB読売記者石橋武治君

3月 修猷館文化祭 東北研修旅行報告展示

5月 本部総会来賓参加

6月 東北修猷会新人歓迎会 東京修猷会来賓参加

(美濃君滝本君―東北大工学部) 10名

7月 宮城県大崎地区・懇親会 8名

これまでも、震災復興状況等 随時東北修猷会ブログあるいはFBにてレポートしています。ぜひご覧ください。

2019年は東日本大震災の記憶が薄れていく中、私個人として、きっかけ食堂@仙台のスタッフとして3月11日から毎月開催される活動に参加しましたが、ここでも取材を受ける中で、修猷館OGの方々と知り合うこともできました。

*きっかけ食堂―東北食材を使った料理やお酒を提供し、その味を通して、毎月11日だけでも東北や震災について考える「きっかけ」をつくりたいと、2014年5月に立命館大学の学生三人が始め、現在全国9か所で毎月11日に開催。

2020年は総会も通算10回目の節目を迎えます。東北修猷会の新たな道筋をしっかりと見つめる年にし、修猷館OBOG、また現役の皆さんに東北に大きな関心を持っていただけるように努力したいと思います。

連絡先 出納 克彦（昭和45年卒）



中国四国修猷会

令和元年6月22日(土)、中国四国修猷会第3回総会は、広島駅近くのホテルニューヒロデンにて、川崎同窓会会長・高島館長・大賀同窓会幹事長・松村近畿修猷会相談役・手島中京修猷会副会長のご臨席を仰ぎ、福岡からの平成3卒キャラバン隊7名・福岡からの一般参加者4名を含め、総勢60名で盛会の内に終えることができました。

3年前に手探り状態で起ち上げた中国四国地区修猷会も3回目ともなると、お互いが顔見知りになり、「やあ久しぶり!」「元気にしているか?」等の挨拶が聞こえるようになりました。

アトラクションでは、全員が1人1分の自己紹介タイムを設け、各人の機転が利いた自己紹介で大いに盛り上がりました。特に高校時代の部活の話となると、「君は○○部やったとや?俺も○○部たい!!」と更なる先輩後輩の繋がりが至る処で新たにできました。

応援部所属だった平成29卒・平成31卒の現役広島大学生には、平成3卒・柴田応援部部长(現役時代)による館歌斉唱指揮・エールにおいて立派に親衛隊としてのミッションを果たしていただきました。

参加者の中で最年長の馬場浩太先輩(昭和31卒)からの「昭和31卒から平成31卒の卒業生が60年以上の時空を超えて一同に会し、このように『修猷館』という名の下に気持ちをひとつに

する、このことが素晴らしい!」のお言葉が強く印象に残りました。

連絡先 河野 浩(昭和46年卒)



その他支部連絡先

東京修猷会

刀禰 晋輔（昭和61年卒）

中京修猷会

満生 修二（昭和45年卒）

鹿児島修猷会

三好 宣彰（昭和55年卒）

「さんざん会」を閉じる

昭和三十三年卒、解散同窓会総会報告



実行員長

露 木 喬

(昭和33年卒)

「令和天皇祝賀御列」の日、第六一回「さんざん会」解散同窓会総会を、盛大に開催した。既に、三割を超える多くの館友を彼岸に送った。その喪失感以上に、六割以上が生きて「傘寿」を迎えたことの意義を思う。

生まれて間もなく戦争を経験し、終戦後の瓦礫の中を生き延びて、高度成長期の企業戦士として闘い、バブル崩壊と共にリタイア。どん底とピークを知る、ある意味で最も幸せな世代だったのかもしれない。

卒業三〇周年を期して、「さんざん会」を立ち上げた。一二〇名参加のもとに、母校で果たせなかった修学旅行を、湯布院への旅で実現した。昭和三十三年卒「さんざん会」三〇周年記念同窓会。貸し切った列車は「サザンクロス号」。その走行時間が三時間三三分。奇跡的な「三尽くし」に、皆で手を叩いて喜んだ。

以来三一年目のこの日をもって「さんざん会」を閉じる。

ソラリア西鉄ホテルに集まった館友、およそ一〇〇名。初めて参加した仲間もいた。遠く関東、関西、山陰などからの参加もあった。

多くの言葉は、もう不要だった。全員で目を閉じ、六一年を一気にタイムスリップし、館生だった当時に戻った。

門を入ると、右手に菁莪堂と記念館大学、正門の前にソテツを植え込んだ小山がある。その芝生に寝転んで、他愛無い会話を楽しんだ日もあった。小山を回り込んで左に目をやると、ラグビー部や野球部が走り回っていた二本木のグラウンドが見える。

玄関を入ると、油雑巾で黒光りする廊下。渡り廊下の右手に小さな売店があつて、ここでつり銭をまんぐつた奴がいた。

廊下を下駄で走ってる奴がいる。自主自立を大事にした修猷館では、殆ど「ベカラズ」がなかった。唯ひとつ記憶に残るのは「下駄を履いて、廊下を走るベカラズ」だった。

教官室を覗くと、懐かしい先生方の姿が見える。名前は忘れても、あだ名は忘れない。「蛸」がいる、「チャボ」がいる、あそこに「池ボン」がいる。始業のベルが鳴っていないのに、もう教材を持って立ち上がっているのは、「消防自動車」だ。あ、「犬殺し」が見える。授業中に入ってきた野良犬を窓から放り投げたという伝説の先生だった。尾鰭がついて、実は二階だったとか三階だったとか。しかし、最後まで「さんざん会」に参加していた先生だった。

さあ、下駄履いた足で、3階まで一気に階段を駆け上げよう。

二段抜き三段抜きで駆け上がるだけの若さがあった。

教室に入る。前の席の生徒の背中に隠れて、早メシ喰っている奴がいる。弁当箱の蓋にお茶を注いで、飯を掻きこんでいる奴がいる。先生を誘って、西新商店街で回転焼きを喰っている奴がいる。

溢れるほどの思い出に包まれて、語り合い笑い合う二時間はあつという間に過ぎた。八〇年使いこんだ身体は、いろいろ部品にガタが来てはいるが、残された日々を健やかに、心穏やかに過ごしながら、八十路の一里塚を一本ずつ立て続けていってほしい。

ここまで私たちの「さんざん会」を育て上げながら、ひと足先に彼岸に渡ってしまった松井昭紀君に、心からの感謝の気持ちを添えて、実行委員長最後の挨拶とした。

未練は残る、淋しさは拭えない。しかし、いつかはどこかでケジメをつけなければならぬ歳である。最後の館歌に声を絞り、握手を交わし合って、「さんざん会」解散同窓会総会を閉じた。

「長い間のご協力、本当にありがとう！」



修猷 さんざん会 令和元年度同窓会 令和元年11月10日

卒業六十年を迎えて―三思会報告

瀧山龍三

(昭和34年卒)

わたし達は今年三月で卒業六十周年を迎えました。平成元年三月は丁度卒業三十周年でしたので、平成の時代がまるまるわたし達の同窓会の後半生ということになります。この機会に平成時代の同窓会の歩みをごく簡単に振り返ってみたいと思います。

わたし達の同窓会は昭和五十七年、その二年後の修猷館創立二百周年をにらんで、組織の整備充実を行いました。その際同窓会名を「三思会」と決めました。これは卒業年の(昭和)三十四年をもじったものですが、その「三思」は「笥子 巻第二十 法行篇」からとったものです。これを本文末に掲げておきます。同時に名簿の充実をはかり、かつ福岡支部(本部)のほかに東京支部、近畿支部をおいて活動することにしました。この三支部は互いに密接に連絡をとりながら、それぞれ独自の活動をおこなっております。福岡支部で言えば七月の暑気払い、十二月の忘年会などです。東京・近畿支部でもほぼ同じですが、各支部の催しには他の支部へも連絡があり、毎回他支部への参加者があります。

三思会全体の活動としては折々に行った総会とパーティー、

それに伴う旅行があります。今はどうなのか知りませんが、わたし達の頃は修猷館には修学旅行はありませんでした。そのせいか三思会で行う旅行を修学旅行と呼ぶ同窓生が多いように思います。

この三十年間のもようをごく簡単に述べます。

○平成元年五月二十二・二十一日、三十周年記念大会を福岡で開催しました。記念式典を菁莪堂記念館で、総会とパーティーを「全日空ホテル」で、二次会を「冷泉閣ホテル」で行いました。参加者は八十五名でした。

○平成六年十月二十九・三十日、由布院で大会を開催しました。総会とパーティーを「ホテル山水館」で行い、次の日由布院散策を楽しみました。参加者は七十七名でした。

○平成十一年十月十一日、卒業四十周年記念大会を唐津で開催しました。前夜祭を「冷泉閣ホテル」で行い、総会とパーティーを「唐津シーサイドホテル」で行いました。この後カラオケ大会や唐津市内観光を楽しみました。参加者は九十名でした。この大会には唐津在住の同窓生のお世話になりました。

○平成十四年十月十九・二十日、京都で大会を開催しました。総会とパーティーを嵐山温泉の「嵐峡館」で行いました。このパーティーには舞妓さん芸妓さんを何人もよんで、いやが上に

も盛り上がりました。特に女性軍が大はしゃぎでした。次の日は二条城などの京都観光をしました。修学旅行気分の特に横溢した大会でした。この大会の開催には近畿支部の同窓生のお世話になりました。

○平成十六年十月二十三・二十四日、沖縄那覇で大会を開催しました。総会とパーティーを「那覇ハービービューホテル」で行い、琉球舞踊鑑賞やカラオケを楽しみました。次の日は沖縄観光をしました。参加者は、七十六名でした。この大会には沖縄在住の同窓生のお世話になりました。

○平成十八年十月十四・十五日、福岡で大会を開催しました。総会とパーティーを「冷泉閣ホテル」で行い、次の日九州国立博物館を見物し、大宰府観光をしました。参加者は百十二名でした。

○平成二十一年十月十四日・十五日、卒業五十周年記念大会を北海道で開催しました。前夜祭を札幌で行い、翌日バスで登別温泉に移動して「登別グランドホテル」で総会とパーティーを行いました。途中洞爺湖観光をしました。参加者は九十三名でした。この大会は北海道在住の同窓生のお世話になりました。

○平成二十三年十月十五・十六日、日田大会を開催しました。「日田山陽館」で総会とパーティーを行い、夜は鵜飼を楽しみました。

た。翌日は田主丸に移動し、「冷泉閣石狩別荘」でバーベキューに舌鼓を打ちました。参加者は七十六名でした。

○平成二十五年十月二十二・二十一日、箱根大会を開催しました。総会とパーティーを河口湖温泉「秀峰閣湖月」で行い、関所跡見物、芦ノ湖遊覧観光、河口湖散策などを楽しみました。参加者は七十八名でした。この大会は東京支部の同窓生のお世話になりました。

○平成二十七年十二月十二日、大会を福岡で開催しました。総会とパーティーを「冷泉閣ホテル」で行いました。参加者は七十一名でした。

○令和元年七月十三日、卒業六十周年記念大会を福岡で開催しました。総会とパーティーを「冷泉閣ホテル」で行いました。参加者は六十二名でした。

以上、この三十年間の総会開催のあらましを述べました。

それにしても飽きもせずよくも毎年同窓会が開かれるものです。三思会の集まりがこれまでスムーズに続いてきたのは、同窓生どうしが互いに仲が良いこと、幹事と支部長とのチームワークのよいことが主な理由だと思われませんが、それに加えて大きいのが三思会発足時からの会長である古賀秀策君の存在です。「冷泉閣ホテル」の社長である同君には、三思会の集まり

には何くれとなく便宜をはかってもらっています。もう十年も前から会長に感謝状や記念品を贈つてはという話も出ていたのですが、何故か三思会はケチで実現せず、結局今年の六十周年の会で幹事からの謝辞と会員の盛大な拍手だけで済ませました。それでも古賀会長はニコニコしていましたから、これでよかったのだと思うことにしています。

この三思会がいつまで続くのかが時々話題になります。近々いさぎよくやめようという意見もあります。会員の半数が元氣なうちは続けようという人もありますが…。

『三思』の出典

孔子曰

君子有_レ三思_一 而不_レ可_レ 不_レ思也

少而不_レ学長無_レ能也

老而不_レ教死無_レ思也

有而不_レ施窮無_レ与也

是故君子

少思_レ 長則学

老思_レ 死則教

有思_レ 窮則施也

孔子曰く

君子に三思有り、而うして思はざる可からざるなり。

少くして学ばざれば、長じて能無きなり。

老いて教へざれば、死して思はるること無きなり。有りて施さざれば、窮して与へらるること無きなり。

是の故に君子は、

少くして長を思へば則ち学び、

老いて死を思へば則ち教へ、

有りて窮を思へば則ち施すなりと。

(荀子 卷第二十 法行篇)

獅子の会 卒業50周年記念同窓会報告

実行委員長

麻生 俊郎

(昭和44年卒)

昨年10月26、27日両日の秋晴れの下、卒業50周年記念同窓会を開催しましたので、ここにご報告します。

開催日の2年前から毎月実行委員会を開催し、練りに練った同窓会でした。

実行委員会を重ね、いよいよ3か月後に迫った委員会の席上で、委員のA君より、「修猷館の中に獅子の会（昭和44年卒）に所縁のある石碑が2本あるが、文字が見え難くなっているのを、これを機会に補修してはどうか？」という発言があった。詳細を調べてみると、在校時に白血病で亡くなった後藤卓司君を追悼する石碑と別に、我々が卒業時に寄贈した、福岡市登録文化財指定の旧正門の鉄製の門扉に関する石碑が確かに存在した。

早速、記念同窓会にお披露目するため、知り合いの業者をお願いして、文字の部分に黒い塗料を塗り、立派な石碑に蘇らせることが出来、同窓会当日を迎えることが出来た。

記念同窓会は、先ず、集合場所である修猷館に集まったのが、105名。旧正門側の蘇鉄の前で集合した面々は、懐かしむ間

もなく中庭のスタンドにて集合写真を撮影。その後、渡辺公利先生の説明を受けながら資料館を見学し、東京オリンピックの競技場に掲げられた五輪旗（安川大五郎先輩からの寄贈）を懐かしむとともに、初めて見る資料などに思いを馳せました。

修猷館を後にして、一同は地下鉄く筑肥線で浜崎駅へ移動、ホテルの送迎バスにて虹ノ松原を通り、宴会場のある唐津シーサイドホテルへ到着しました。宴会へ直接参加するメンバーも続々とホテルへ到着し、ロビーでの集合写真を撮影した後、総勢131名の大宴会の始まりです。

酒宴の前に、50余名の物故者に対し全員で黙祷を行い、修猷館同窓会会長である川崎隆生君の挨拶、獅子の会50年の歩みや会計報告、東京及び近畿・中京の獅子の会活動報告の後、修猷館同窓会副会長の津田純嗣君の乾杯の音頭で、いよいよ大宴会が始まります。

飲み放題の宴会だったのだが、同級生の中尾卯作君の綾杉酒造、豊村理恵子さんの豊村酒造や後藤元秀君の後藤酒造からの銘酒や個人的な焼酎の持ち込み、一年後輩の安恒陽一君が修猷館に植えてある太宰府天満宮所縁の梅の木から採れた梅の実を使って作った梅酒の寄贈などもあり、お酒には不足なしの大宴会が2時間ほど続きました。

大宴会では、同級生同士の語らいの時間を十分に確保したことで、50年間の空白を埋めるべく、それぞれ話が弾み、満足していく2時間であった。

大宴会の締めは、全員による館歌斉唱と元応援団長である小

生の音頭によるエールで無事終了し、宿泊せずに帰路に着く面々を、皆で送迎バスまで見送りし、いよいよ2次会のスタートです。

2次会では、当初用意していたつまみの他に、後藤元秀君からの差し入れの新鮮な天ぷらなどをつまみに、延々と話が弾んだのですが、23時に2次会も終了し、残った酒やつまみを持ってそれぞれの部屋に帰って行き、それぞれ何時まで3次会をしたのやら…。

翌日7時には、殆どの宿泊者が朝食をとりに食堂へ集合し、その後、旅行へ行かない面々に見送られて、貸し切りバス2台(71名)で呼子へ向けて出発しました。

呼子では、船による七ツ釜遊覧(船長によるユニークな説明付き)を楽しみ、朝市でそれぞれ面白い物をし、一路豊臣秀吉が朝鮮出兵の基地とした名護屋城へ向かいました。

名護屋城博物館では、学芸員による丁寧な説明を受け、名護屋城跡ではボランティアの方の興味深い説明を受けながらの見学後、昼食はイカの活き造りを堪能しました。

その後、唐津方面へ戻り、旧高取邸及び唐津城をやはりボランティアの方の説明を受けながら見学し、呼子や唐津にこれだけの立派な文化遺産があることを改めて知らされ、歴史好きには非常に有意義な時間を過ごしました。

帰りに、「唐津うまかもん市場」に立ち寄り、自動車専用道路を経由して一路天神日銀前へ、日もすっかり落ちた天神で、次の再会を約束し解散、一連の同窓会の幕を閉じたのでした。

40周年のバス旅行では、バスの中に用意したビール等のアルコールでは足りず、途中で仕入れたアルコール類もすべて飲み干し、バスの運転手やガイドさんに呆れられるほどでしたが、10年の年を経て皆わきまえるようになったのか(または、弱くなったのか)、最後に余ったアルコール類はお土産になりました。



還暦遠足顛末記

「じゆうに会（昭和52年卒）」



藤田 豪太郎

（昭和52年卒）

期友の多くが還暦を迎えたこの春、我々「じゆうに会」では《還暦大同窓会》に前後して遠足を実施したので、ご紹介させていただきます。

計画はおよそ1年前に始まった。還暦を迎えたことで同窓会を開くことはすでに決定事項。ゴルフも決まっていた。そんな中で聞こえてきたのが「私ゴルフやらせんもん!」「女子で何かせん?」「やっぱ昼からでちゃ飲まんといかんやろうもん」の声。「なら、近場でちよつと旅行でもするね?」ということになり、同窓会を土曜日夕方からとし、その前と翌日に小旅行を企画することになった。うきは市で観光関連の仕事をしていた私は、地元への2コースを提案させてもらった。その他には「俺、よかとこ知つとう」という者が担当する「玄海飲んだくれツアー」ができた。

私は自分のコースのテーマを「パワースポットめぐり」「ス

イーツと買物の女子旅」とした。この歳になっても助平ゴコロ満載である。

土曜日に開催した「パワースポットめぐり」には10名が参加した。期友の一人が理事長をつとめる幼稚園のバスを使わせていただき、わいわいガヤガヤと筑後路へ。毎月1回しか入ることのできない装飾古墳を見学し、茅葺きの古民家で囲炉裏焼ランチ。91基の朱い鳥居がインスタ映えする浮羽稲荷神社に立ち寄った後は、筑後市まで足を延ばし恋木神社で縁結び祈願という行程とした。

また160名以上が参加して深夜まで飲み歩いた（らしい）大同窓会の翌朝に出発した「ス イーツと買物の女子旅」には、眠い目をこすりながらも23名の参加者があつたが、比較的静かな印象の車内であった。「あまおう」も食べ放題のイチゴ狩りを始めると酔いも醒め、満足度九州第一位の道の駅でお買物、お寺で80歳代の住職が作る精進料理。午後は観光ガイドの会長が案内する筑後吉井で白壁のまち歩き、最後に地元のフルーツや牛乳たっぷりのジェラートと詰め込んだ。

もう一つの「玄海飲んだくれツアー」（今ではお魚を食べに



行こうツアーと呼ばれる)にも23名が参加した。漁港から渡し船でしか行くことのできない料理屋へのツアーである。現地での様子は筆舌に尽くせないが、帰路立ち寄った唐津城で全員が満足そうに笑っている記念写真で想像していただきたい。

ところで、我々「ごじゆうに会」では毎年正月に同窓会を開催してきたものの普段の出席者は40名ほど。全国、はては海外からも多くの朋友が集まったのは十数年前の大同窓会幹事以来であった。しかも、この十数年間で男子も女子も風貌を大きく変えてしまった輩が多い。再会がいきなりツアーの集合場所となった者は、自分が参加するグループと思いつながらも遠巻きに見ていたり、目の前にいる奴に「誰や?お前」といった場面は必然であった。さらに、来るはずのない(予約がない)人間がいるといった「怪奇現象」もあったが、これは私の失態と判明。大変失礼しました!

還暦でも「遠足」と言ってしまったのは(同じ学年でのツアー)〈行先は遠くない近場まで〉〈引率者の言うことを聞かん〉〈楽しみは食べること〉〈前の晩は眠れない(私だけ?)〉等の理由であるが、子どもの頃の遠足と大きく違ったところも。一番は「ちよつと歩いたらすぐ座ること」おいおい、まだ早かろうもん。「大同窓会(ホテルでの宴会)」と「遠足」によって、高校時代は話をしたこともなかった同士でも話が弾んだ2日間であった。

この遠足を終えて後に会った朋友から「また行きたかね」「今度は秋が良かろう」などと声をかけられる。これまで社会の第

一線で戦ってきた世代が還暦を過ぎ、これからは時々故郷に集まって楽しい時間を共有する、一つの形が生まれたのであれば嬉しい限りである。

「おいしい、毎年でもするけんね!」



卒業二十五周年学年同窓会から



党 智

(平成6年卒)

昨年一月三日に卒業二十五周年を記念した学年同窓会を中洲のグラナダスイート福岡にて開催しました。当初の想定人数には及ばないものの九十一名の出席のもと、新年にふさわしいにぎやかな会を開催することができました。

卒業二十周年の会から五年を経て

私たち平成六年卒はさかのぼること五年前に、卒業二十周年の学年同窓会を開催（十年ぶりに）しました。その会での最も重要なテーマとして、学年の名称を決めることを行いました。複数の案の中から約八割の得票を経て「六星会」という名称に決まりました。ひと目でおわかりになる通り、六光星から頂いた名称です。少しおこがましいのでは、との声もありましたが、逆にその名に恥じぬ活動をしていこう、という声も多く聞かれ、平成二十六年より「六星会」として学年の結束を強める活動を行ってきました。

それから五年が経ち、同学年内には少しずつ名称も浸透し、

この度、二十五周年を迎えたわけですが、今回の会の目的を親睦にプラスし、これからの五年に向けてのキックオフという裏テーマを持つて段取りしました。様々な企画や先方のご招待も検討しましたが、最小限のシンプルな会の進行を行い、二つに絞ったアトラクションの中で卒会会の先輩方による総会のキャラバンを会の目玉の一つとして位置づけました。揃いの衣装に身を包む先輩方の姿こそが五年後の私たちの目指すべき姿とアウンスをさせて頂きました。その主旨を理解してくれたこともあつてか、直前に行った福引抽選会で一等の商品券一万円を引き当てた二名ともが、その商品券全てをキャラバンのグッズ購入に使うという、とても粋で盛り上がったアトラクションとなりました。

いつもながらの気配りに感謝する二次会

二次会は、毎年、同窓会総会の二軒目や、プチ学年同窓会でいつも利用させて頂いている大名の「ワインの酒場。DIP UNTO（ディプント）」にて行いました。名物の生ハムが圧巻でコスパに優れるこのお店は、我らの同級生上村聡君が経営している会社のお店です。今回も約四〇名で店の半分を貸し切り、ぎゅうぎゅうになりながら色々な昔話（主にばか話）に夢中になりました。毎度のことですが、お店の段取りからスペシャルプライスまで、上村君にはいつもわがままを聞いてもらっています。今回、本人はスケジュールの都合であいにくの欠席でしたが、事前のお店の仕切りはもちろんのこと、会の途中にも

遠隔操作での気づかいを頂き、最後には全員にお土産まで用意してくれて、最高の形で会を締めくくることができました。

周知方法の模索

今回の学年同窓会を開催するにあたり、四百名以上の同級生への周知について、非常に悩み苦労をしました。十年前は往復はがきを基本線に Face book とメールを駆使し、周知と出欠確認を進めました。今回、限りなく全員への確実な周知を目指しつつも、少し実験的な意味合いも込めて、どこまで省力化が図れるかということへ挑戦していくこととしました。理想形は『有機的に情報の拡散が自走する』形であり、例えるならアメーバのような情報の浸透です。これだけ情報伝達ツールが多様化し、利便性が向上する中で「学年同窓会開催」という有益な（と思ってもらえる）情報がどのように広がるかを見つつ、それによって学年のネットワークの拡充がどこまで図れるかに期待しました。

結果は当初思い描いた理想形にはほど遠く、まだまだそう甘いものではないという現実です。諸先輩方からお聞きしていた地道な人集めの重要さや、そもそも同窓会が魅力的なものであるための場作りなど、課題の多さを改めて実感した次第です。（ちなみに現在、最も有効な手段は LINE のグループトークです。ただ、それでもつながっている人数は百八十八名と学年全体の半分以下にとどまっています）

これからに向けて

まずは今まさに進行中であるのが、今年の六月に東京で開催される東京修猷会総会の幹事としての準備です。東京チームは一昨年六月より幹事長の岡武志君を中心に、毎月六日を六星会の日として集合し、ネットワークの構築から始まり、総会準備の打ち合わせを重ねております。場所は、これまた同級生の武井浩治君がオーナーの中目黒にある「s i f f l e t（シフレ）」というお店です。私も昨年の東京修猷会総会の時に二次会で行いましたが、とても洒落た私たちには似つかわしくない佇まいながら、地下の部屋のキャバにも優れ、まさに「基地」に相応しいお店です。毎度、武井君には様々な手のかかるわがままを聞いてもらっており、参加者が岡君たつたひとりの時があるなど迷惑をかけつつも、手厚いバックアップを続けてくれております。

一方、福岡の方はまだまだエンジンがあたたまつてはおりませんが、リードする東京チームの熱気ももらいながら、ようやく「六日の六星会」を隔月ではじめました。同じ日時に開催する東京チームとビデオ通話をつなぎ連動感を出すなど、試行錯誤で少しずつ歩みを進めております。

私たちの学年は一つ上の先輩や一つ下の後輩の学年の活発な状況に比べると正直、地味であると自覚せざるをえません。諸先輩の経験談やアドバイスを聞くにつれ、我が学年のこれからは不安を感じる状況ですが、まずは東京修猷会総会を無事に成功させ、その成功体験をもとに進めていければと考える日々

です。(六星会の皆さん、ぜひお願いします！)

最後に、先ほど紹介させて頂いた上村聡君が昨年八月に急逝しました。現役時代はラグビー部の主将として、誰からも一目を置かれる存在であり、これからの六星会においても強力に頼りとする人物でした。とてつもない大きな損失であり、悲しみは絶えません。彼の安らかなご冥福をお祈りするとともに、残された者として精一杯生きていくことを、この場をお借りして記させて頂き、結びとさせて頂きます。



二次会 Di PUNTO(ディブント)にて

学年一口連絡アンケートナ

【昭和17年卒】 令和二年発行の同窓会名簿の学年名簿を手にして、予想はしていたものの愕然とした。現存者数一九名で一頁に納まっている。逆に同窓英霊二三名を割ってしまった。総類三二七名で卒業生数では二三五名。福岡で声が聞けるのも荒木・伊佐・伊藤・梶原・松尾の五名となった。川村君と共に「菁莪」から（S17卒）の文字が消えてしまった。

伊藤 康彦

【昭和24年卒】 戦時下の旧制中学

太平洋戦争開戦から四ヶ月後の昭和17年四月、五年制旧制中学に入學したが、戦争も激しくなつて制度が変わり、中学は四年制になった。

それも東の間四年制のとき終戦となり、五年制が復活、四年卒業、五年卒業が自由選択となった。

21年卒と22年卒は同窓生で、会の名称は破竹会、会員は今年卒寿を迎えている。

在学中は学業より戦争遂行が優先し、勤労奉仕で陸軍莆田飛行場（現福岡空港）の土木作業、飛行機の燃料になる松根油生産のため新宮町や和白周辺の松林で松の根掘り、糸島農家の稲刈りなど奉仕した。

終戦直前一年数ヶ月は組ごと軍需工場に動員され、工具として働いた。二級下と一級下の組は市内電車へ運転士として動員、西鉄大牟田線は南筑中学の生徒が運転していた。

兵役関係では、陸軍幼年学校、海軍予科練、海軍兵学校予科などへ三十数名の入隊、入校があった。

「進め一億火の玉だ」「欲しがりません勝つまでは」などの檄文が町角に貼られるなど、戦争一色から敗戦を体験、波乱の中学時代だった。

同窓会では近年になつて回数が増え、年三回、十二〜十三名の出席で行われ、幹事会（門戸開放）は毎月一回、六〜七名で飲み会を行っている。幸い会場に恵まれ、同一会場で継続している。

田中 宏

【昭和23・24年卒】 六〇会員（23年旧中、年卒）で、新章 回生（24年卒）に進学した人にお願ひします。

住所変更と物故者届出については、本部には2学年分をお伝え下さい。この件、ご家族などに周知のこと。私の学年名簿チェックを終了します。月例会は「平成」で終了。

本部は館の東北側四角にあり。

学年幹事 井上 哲司

【昭和26年卒】 我々の学年は「仁禄通信」を三ヶ月おきに発行している。ハガキを配布して「ひとこと集」として近況報告を集めてワードで組み替えて小冊を発行している。現在141号を編集集中である。非常に好評であるがそろそろ編集委員も疲れて来たのも事実である。集合する会は福岡では「じんろく会」で偶数月26日に八仙閣内の銀香梅に20名位集まっている。

中里 公哉

【昭和28年卒】「猷友会」・令和の世、オリンピック、天災地変の無い年で有りますように。猷友会皆さんのご健康とご多幸を祈ります。昨年度は十月三日、福新楼に三十四名で総会を祝ったが、会の運営に尽力してくれた安東君、辻田君の逝去は無念でした。東京猷友会は十一月一日二十人集り解散お別れ会を行った。永い間お世話してきた吉見君、松尾正弘君、高橋達君ご苦勞様でした。本年猷友会は例年通り十月二日（金）正午より福新楼で行います。

世話人代表 辻 博

【昭和29年卒】福岡六八会は十月十九日、加藤元博会長より岡部巨雄新会長にvari、年号も新たに令和元年の会をしました。参加者同伴者も含め、約五十名でした。毎年春と秋に年二回開催、東京六八会からの参加もありいつも盛会です。参加出来なかった人の近況報告を、参加者に配布し声かけ、励まし等を心がけています。参加者の増える事を願っています。

幹事 岡村 祥三

【昭和32年卒】学年同窓会「三二会」は二〇一七年六月、二日市温泉で会友百余名参加の大祝宴を催し、全体会を閉じました。しかし、我々最後の旧国民学校生（昭和二〇年四月入学）たちの「のぼせ」は収まらず、その後も毎月数回の小集会を続けています。第二木曜日は囲碁会（同窓会館）、第三木曜日は総合情報交換会（新天町・平和楼Ⅱ夕刻）、第四木曜日は麻雀会（天神西通り）のほかゴルフ・コンペも随時企画しています。福岡都市圏に住む会友のみなさん、心置きなく参加してください。

帰省するみなさんどうぞ。連絡お問い合わせは三二会 水迫裕幸へ。

追記 この度、安西豊治君が自伝「だぼハゼ一代記」を出版しましたので詳細を知りたい方はへ連絡して下さい。

【昭和33年卒】昭和三十三年に卒業した私共は今年歳も八十才になるのを記念し最後の同窓会を福岡市のホテルで開催した。東京や大阪からも多数顔を出し全部で百余名の会となった。

皆それぞれ六十年余りの人生を経てそれなりの顔となっており、あと何年生きておられるか判りませんが、各自おのが道を歩み続けてゆくと思われます。

入江 正徳

【昭和36年卒】三六会の皆さん、お元気ですか。今年はオリンピックの年、そして来年は我々が修猷館を卒業して六十年、「還暦同窓会」の年です。

懇親会に続いて修学旅行？ゴルフ大会？…。何か良かプランがあったら連絡してください。

それより一人ひとり健康に気をつけて、全員集合で同窓会を楽しみましょう。

田中 敦

【昭和39年卒】昭三九会の代表として、長年同窓会活動を支えてくれた武谷峻一君の訃報です。

この数年、間質性肺炎に悩まされ闘病生活を余儀なくされて

いしましたが、令和元年八月二十二日に逝去されました。
ここに謹んで彼の冥福を祈りつつ、同窓生の皆様へご報告いたします。

昭三九会代表 末永 浩毅

【昭和45年卒】 令和二年私達「四の五の会」は卒業50周年を迎えます。毎年開催している、「新年会」の前に2月1日(土)追悼法要「亡き友人たちを偲ぶ会」を妙泉寺にて行い、10月18日(日)「50年目の文化祭」と題してタカクラホテル福岡にて懇親会を開催します。懇親会以外にも数々の記念行事や小旅行等の企画を予定しています。多くの会員の皆様の参加をお待ちしています。

「四の五の会」は皆様への連絡MLをグループグループへ変更しました。新しいML

管理人井上勇介

登録よろしく願います。

です。

2月第1土曜日の「新年会」と 月の同窓会総会後の「学年同窓会」を毎年開催しています。今年の担当世話人は1・3組です。開催場所等詳細は新しい連絡先より皆様へお知らせします。ので、予定を入れておいてください。

森下 七百枝

【昭和46年卒】 よかろう会は、例年通り同窓会を行っています。一月三日の新年会、五月の同窓会総会懇親会後の同窓会、八月盆休み前後の夏の会、十月のゴルフ一泊旅行を行っています。皆様元気で再会しましょう。是非皆様参加して下さい。

八 副島 広巳

大賀 啓史

【昭和49年卒】 私達よろしく会は、各地で色々な活動が続いています。東京では大人遠足と称した粋な勉強会なども盛んにやっています、この秋には小田原への二泊三日の旅を呼びかけました。遊びも学びも沢山詰まった旅でした。福岡でも二年後のよろしく大旅行の企画準備中です。数年前の大阪メジャー企画の京都紅葉の旅も忘れられません。「いい旅いい宴をいい仲間と」を柱に今年もやっています。

小柳 有美

【昭和50年卒】 「気まぐれ通信」第16号はお手元に届いているでしょうか。年1回発行の「気まぐれ通信」が16号を迎え、改めて月日の経つのは早いものだと思ふ感慨が湧いてきます。11月9日(土) 23名の参加で「福岡五輪会同窓会」が開催されました。翌日は、伊都ゴルフ場で五輪会コンペ。15名の参加でした。東京五輪会・近畿五輪会もそれぞれの地で集まりを開催しています。この頃ご無沙汰というあなた。久しぶりに今年は顔を出してみませんか。

伊東 望

【昭和54年卒】 合志会の全員が還暦を迎えた2021年4月17日(土)に記念の同窓会を行います。学年内のお知らせは、合志会サイト、メール、リスト、Facebookいずれかを、ご覧ください。

合志会サイト (<http://54kai.star6.jp/>) 公開部分には修猷館関連情報を掲載。他学年のみならずからの情報もお待ちしております。

ます。

連絡担当 菊池 政道

【平成元年卒】 いよいよ令和2年は、東京、福岡に続く最後の当番幹事近畿修猷会幹事の年です。1月から1年間各種イベントを運営します。実行委員長の国武勇志くんを筆頭に、近畿在住のみんなが準備を始めていますが、まだまだマンパワーマ集中です。メルリングリスト、Facebook、HP等で情報発信しますので、みなさんのご協力をお願いします。総会に合わせて『祝生誕半世紀！記念同窓会ツアー』計画中です！50歳記念の大同窓会しませんか？
ガンガン会、ガンガン行こう！

学年幹事 王丸 寛美

【平成2年卒】 同窓会総会の幹事学年が終わりました。ご協力ありがとうございます。

事務局 三戸 宗一郎

【平成3年卒】 令和2年5月29日金曜日、ホテルオークラ福岡において、同窓会総会が開催されます。今回は我々平成3年卒が幹事を務めます。同期の総力を結集して総会を盛り上げていきたいと思っておりますので、皆さんのご協力をよろしくお願い致します。

柴田 修

【平成9年卒】 平成9年卒の皆様、御無沙汰しています。私達九猷会は、例年の集まりとして福岡では年明けの一月二日に新年会を開催しています。関東では南部芳子さんや竹野耕平君を中心に不定期に集まっています。Facebookで告知することが多いため、可能な限りアカウントを取得の上、ご連絡いただければ幸いです。

峰 雅紀

【平成10年卒】 平成10年卒の皆さん、我々とうとう40歳になってしまいましたね。人生まだまだ折り返し地点、働き世代頑張ってくださいませよー！

学年同窓会用のメールアドレスが使用出来なくなりましたので今後は
でご連絡しますのようしくお願いします。

マメこと村上 弘

『ご寄付への御礼』

昭和20(5)年卒金鶏会様、昭和28年卒東京猷友会様より、活動終了に伴い、ご寄付をありがたく頂戴いたしました。

厚く御礼申し上げます。

修猷館同窓会 事務局

学校報告

創立記念講演

小田急電鉄 特別顧問

大須賀 頼彦 氏

(昭和37年卒)

本年度の創立記念講演には、小田急電鉄株式会社の特別顧問である、本校昭和37年卒業の大須賀頼彦氏にお越しいただき、「鉄道からみえる日本、そして日本人」と題してご講演をいただいた。

講演の中で大須賀氏は、ご自身の生い立ちに触れ、戦後の貧しい時代、小・中学校でどのように過ごしてこられたか、そして修猷館高校でどのように学んできたかを話され、その後、座右の銘ともなる西郷隆盛の言葉「敬天愛人」との出会い、その言葉が現在の人生に大きく関わったことなどのご自身の経験を生徒に伝えられた。

そして、大須賀氏は、小田急電鉄株式会社社長の時に社員に伝えてきた経営理念「信用、信頼、愛、尊敬」について触れ、社長（トップ）の仕事は「大きな会社」にすることではなく「良い会社」「愛される会社」にすることであると自らの経営に対する信念を伝えられた。

日本に鉄道がどのように伝わり、発展してきたか、その歴史をたどりながら、鉄道だけでなく日本の地理的条件などを交えた話は非常にわかりやすいものであった。

まとめとして「人間力を高めよ」と題して修猷生に大須賀氏ご自身の思いを生徒に伝えられた。

失敗を恐れず挑戦することの大切さ、失敗したからこそ学べる話を話され、自分の可能性を信じてでっかいことにも挑戦する、そういう気概・意欲を持ってほしいと訴えられた。

1 Boys be ambitious !

2 Do the nearest duty !

3 人生は舞台、主役は君だ！

最後に、大須賀氏の修猷生に對する思いを右記の3つのメッセージでまとめられた。

生徒は、大先輩の情熱ある言葉が心に深く届いた様子であった。



文化講演会

一橋大学 名誉教授

石倉 洋子 氏

本校の秋の風物詩となつている文化講演会は、各界で活躍されている方からご講演をいただくことで、修猷生の文化的素養を高め、その志を確たるものにする貴重な機会となつている。本年度は一橋大学名誉教授の石倉洋子先生をお招きし、「大変化の時代、あなたの可能性を求めよう」という演題でご講演いただいた。

今年だけでもフランスのニース、ブラジルのサンパウロ、イスラエルのテルアビブなど世界各地でご講演されている石倉先生は、本校生にも良く通る洗刺とした声で語りかけてくださった。これまでの常識が通じないこれからの世界にあつて、たった一人しかない自己を知り、自らの人生を自らの意志で選択し、具体的なアクションを起こして欲しいという先生のメッセージは、全ての修猷生の胸に響いた。また、今なおプロگرامミングを学び、スポーツを日課とされ、様々な会を主宰されつつ世界の各地を訪れられている先生のポジティブな生き方には、国境や年代を超えて聴衆を引きつけるエネルギーが感じられた。講演後は質問が相次ぐとともに、その後の懇談会も多くの生徒で賑わい、出席者は石倉先生と直接お話をさせていただくこと

ができた。講演者と生徒という垣根を越えた言葉のやりとりには、修猷館の「語り」の伝統が感じられた。それはまた、石倉先生の言葉が生徒の言葉となり、次なる修猷の文化が育まれる時間でもあった。

石倉先生に改めて感謝の意を表するとともに、この講演が本校生一人一人にとってより意欲的に学び、主体的に生きるきっかけとなることを期待する。



令和元年 部活動

事業部 (4)

執行部・議長団・応援部・新聞部

文化部 (19)

文芸部・演劇部・映画制作部・物理部・化学部・生物研究部・数学研究部・写真部・コーラス部・吹奏楽部・美術部・書道部・ESS部・JRC部・華道部・茶道部・パソコン部・デイベート部・放送部

体育部 (16)

弓道部・剣道部・柔道部・水泳部・山岳部・陸上部・野球部・ソフトテニス部(男子)(女子)・テニス部(男子)(女子)・卓球部・バスケットボール部・バレーボール部(男子)(女子)・ラグビー部・サッカー部・ヨット部・バトミントン部

総合部 (1)

文体総合部

現在40のクラブの下で現役生は元気に活動しています。各クラブ活動については修猷館HP「部活動紹介」をご覧ください。

修猷館生の活躍

令和元年8月に開催された全国高等学校総合体育大会陸上競技400メートルにおいて、3年生の藤好駿汰君が46秒88を記録し、3位入賞を果たしました。また、同月に開催されたU20日本選手権において5位入賞を獲得しました。

令和元年8月に開催された全国高等学校体育大会ヨット競技において、女子レーザージャール級で1年生の西澤佳菜さんが5位に入賞しました。

令和元年10月に開催された「茨城いきいきゆめ国体」ラグビーフットボール競技少年の部において、3年生の野口大介君が福岡県選抜チームにスタンドオフとして選出され、見事優勝を飾りました。

令和元年7月に開催された、全国高等学校総合文化祭佐賀大会において、新聞部が全国紙面審査(新聞コンクール)で優良賞を受賞しました。



ヨット部

同窓会の歩み

- 一・一〇 役員会・学年幹事会合同新年会（アークホテルロイヤル福岡天神 一二三名）
- 二六 宮崎修猷会（隠れ里の懐石料理わらしべ 高島館長・大賀幹事長 二〇名）
- 二・二 鹿児島修猷会（ソラリア西鉄ホテル鹿児島 高島館長・田中事務局長 三三名）
- 一二 菁莪発送
- 一六 大分修猷会（ホテルニューソルタ 高島館長・田中事務局長 二二五名）
- 二六 修猷協会理事會
- 三・一 同窓会入会式（大賀幹事長、田中事務局長 他八名）
- 二 第七二回卒業式（川崎会長、大賀幹事長、田中事務局長 他七名）
- 二八 修猷協会理事會
- 四・九 入学式 四四〇名（男子二二〇名 女子二二〇名）（川崎会長・西高辻副会長・大賀幹事長・田中事務局長 他）
- 五・九 平成三〇年度会計監査
- 九 学年幹事会（平成三〇年度会計決算承認）
- 二四 修猷館創立記念講演・卒業生キャリアセミナー
- 二五 同窓会総会（ホテルオークラ福岡 二三四名）
- 六・一 中京修猷会（東桜会館 井上副校長・田中事務局長 四四名）
- 二 OBゴルフ大会（福岡カンツリー倶楽部 和白コース）
- 七 東京修猷会（ホテルハイアットリージェンシー 東京 高島館長・川崎会長・津田副会長・西高辻副会長・大賀幹事長 六一六名）
- 一七 佐賀修猷会（グランデはがくれ 平野教頭・大賀幹事長 四八名）
- 二〇 修猷協会理事會・評議員會
- 二二 中国四国修猷会（ホテルニューヒロデン 高島館長・川崎会長・大賀幹事長 六〇名）
- 七・一〇～一七 生徒海外研修（アメリカ西海岸）
- 九・七 大運動會
- 二三 修猷協会理事會
- 一〇・二五 北九州修猷会（高島館長・川崎会長・津田副会長・西高辻副会長・大賀幹事長 六七名）
- 一一・二 近畿修猷会（ヴィアール大阪 高島館長・川崎会長・大賀幹事長 二三四名）
- 一六 沖縄修猷会（琉歌 高島館長・川崎会長・大賀幹事長 一六名）
- 二一 応援歌伝承會

二三 熊本修猷会（アークホテル熊本城前 高島館
長・川崎会長・田中事務局長・大賀幹事長
二九名）

一二・七 長崎修猷会（中華菜館「慶華園」 高島館
長・田中事務局長 三一名）

七 東北修猷会（仙台ガーデンパレス 井上副校
長・大賀幹事長 二六名）

※毎月第2木曜日役員会
（5月・8月・12月・1月を除く）

※名簿管理・菁莪編集・ホームページ運営・
歴史伝統伝承・資料館運営
各委員会 適宜開催

役員会・学年幹事会報告

二月一四日

- (1) 学校から 大文化祭について・部活動報告
- (2) 役員会・学年幹事会合同新年会報告 123名参加
- (3) 支部総会報告

(4) 各種委員会から

・菁莪編集委員会 菁莪發送
・名簿管理委員会 来年度2020年に名簿発刊予定

三月一四日

- (1) 学校から 高校入試合格発表について
 - (2) 全国大会出場のお祝いについて
 - (3) 同窓会入会式について
 - (4) 卒業式について
 - (5) 支部総会報告
 - (6) 各種委員会から
・資料館運営委員会 資料の整理は検索レベルまで完了
 - (7) 修猷協合理事会報告
・グラウンド整備の補助について
・学校のエアコンについて
審議事項
- (1) 名簿発行について
・本年9月に印刷業者決定、来年5月発刊予定
・定時制・通信制の取り扱いについて
- (2) 2020年同窓会総会日程の承認
5月29日（金）ホテルオークラにて

四月一二日

- (1) 学校から 館長・参事兼事務長・副校長・教頭の挨拶
- (2) 修猷館高校職員の転任について 同窓会より饞別

(3)各種委員会から

・歴史伝統伝承委員会 応援歌伝承会を11月21日(木)に実施予定

(4)修猷協会理事会報告

・グラウンド整備の請負契約について

審議事項

(1)令和元年度学年幹事会について

五月九日 学年幹事会

報告事項

(1)修猷協会から

・グラウンド整備について

議事

(1)平成30年度事業報告及び決算会計報告

(2)会計監査報告並びに決算承認の件 承認

(3)令和元年度事業計画及び予算(案) 審議並びに承認の件 承認

(4)役員選出の件 承認

協議事項

(1)令和2年(2020年)名簿発行について

六月一三日

(1)学校から 創立記念講演を実施

部活動報告、アメリカ研修旅行について

(2)学年幹事会報告

(3)同窓会総会報告

(4)支部総会報告

七月一日

(1)学校から 海外研修 アメリカ西海岸7月10日から17日

東京研修 8月1日から3日

部活動報告

修猷大運動会 9月7日実施予定

(2)支部総会報告

(3)修猷協会理事会評議員会報告

審議事項

(1)同窓会名簿の発刊について

・定時制・通信制の取り扱いについて審議

・名簿委員会の意見、定時制・通信制の意見を聞き、川崎会

長一任で決定、9月役員会にて発表

九月一二日

(1)学校から アメリカ研修について

英国イートンカレッジ校のサマースクールについて

(2)全国大会出場のお祝いについて

新聞部・書道部・デイベート部・山岳部・陸上部・ヨット部

文体総合部囲碁部門

(3)総会担当学年引き継ぎについて

(4)各種委員会から

・菁莪編集委員会 投稿の依頼

(5)名簿発行について

・定時制・通信制の分冊を決定

十月十日

(1)学校から 海外派遣報告

部活動報告

(2)各種委員会から

・名簿管理委員会 入札の結果、凸版印刷に依頼することに決定

・菁莪編集委員会 菁莪 寄稿依頼

(3)修猷協会理事会報告

審議事項

(1)名簿について

十一月四日

(1)学校から 海外派遣報告会について

柔道部女子 九州大会へ

応援歌伝承会について

(2)各種委員会から

・歴史伝統伝承委員会 応援歌伝承会について

・名簿管理委員会 名簿広告の協賛依頼について

・菁莪編集委員会 学年一口アンテナの寄稿依頼

お知らせ

同窓会における名簿管理について

名簿委員長

松 本 一 範
(昭和62年卒)

令和二年は、五年毎に作成している『修猷館同窓会名簿』の発行年です。現在、五月の発行に向けて、名簿委員会十一名で準備を進めております。『菁莪』の誌面をお借りしまして、同窓会の名簿管理状況の報告と同窓会名簿のご案内をさせていただきます。

●同窓会の名簿管理

平成二十三年に役員会にて名簿管理委員会を立ち上げ、約二年間をかけて名簿管理を内製化させ、外注体制より移行し、同窓会本部でのデータ管理を行ってまいりました。前回の名簿が、同窓会本部でのデータ管理に移行してから、初めての発行となりました。初回でしたこともあり、データ管理、発送準備、マニュアル等の作成に大きく時間を取られる事となりましたが、その当時の名簿委員の努力と苦労のおかげで、遅れることなく無事に発行することができました。

●同窓会名簿発行のご案内

今年五月に発行する同窓会名簿は、名簿管理を内製化してから二回目の名簿発行となります。前回同様、印刷業者との打ち合わせなどをすべて自分達で行う必要があり、負担は大きいのですが、同窓会事務局のお力もお借りして、滞りなく準備を進めています。

今回の『菁莪』に、名簿購入の予約申し込み用紙が同封されていますので、ご購入を検討していただければと思います。また、名簿広告のご協賛も二月末まで受け付けています。詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい。

『同窓会名簿』が、館友の皆さまに活用され、それぞれの同窓会活動を活発にすることができれば、名簿委員会として、これ以上の喜びはありません。よろしくお願いたします。



修猷館同窓会役員名簿 (自二〇一九年五月 至二〇二〇年五月)

顧問	波多野聖雄 (S 26卒)	常任幹事	福泉	忠興 (S 59卒)
相談役	出光 芳秀 (S 31卒)	幹事	中村 成克 (S 60卒)	
名誉会長	相談 久保田勇夫 (S 36卒)		中本 純徳 (S 61卒)	
会長	高島 孝一 (館長)		松本 一範 (S 62卒)	
副会長	川崎 隆生 (S 44卒)		大野 慶樹 (S 63卒)	
	伊藤 哲朗 (S 42卒)		今泉 忠 (H 1卒)	
	津田 純嗣 (S 44卒)		三戸宗一郎 (H 2卒)	
	西高辻信良 (S 47卒)		野村 健志 (H 3卒)	
常任幹事	大賀 啓史 (S 46卒)		石橋 顕 (H 4卒)	
事務局	田中 雅美 (S 50卒)		能見 信二 (H 5卒)	
常任幹事	川村 啓造 (S 40卒)		党 智 (H 6卒)	
	渡邊 章 (S 41卒)		池下 智 (H 7卒)	
	羽田野節夫 (S 42卒)		田中 健吾 (H 8卒)	
	松本 正隆 (S 43卒)		峰 雅紀 (H 9卒)	
	麻生 俊郎 (S 44卒)		村上 弘 (H 10卒)	
	森下七百枝 (S 45卒)		石橋 知也 (H 11卒)	
	鞍垣 吉政 (S 47卒)		松尾 光泰 (H 12卒)	
	黒木 篤 (S 48卒)		赤司 雅之 (H 13卒)	
	小柳 有美 (S 49卒)		中村 道彦 (H 14卒)	
	半田 敦士 (S 51卒)		進藤 靖子 (通58卒)	
	作間 功 (S 52卒)		末安 竹一 (定27卒)	
	堤 勝也 (S 53卒)	監	石田 淳子 (S 58卒)	
	菊池 政道 (S 54卒)			
	有岡 利康 (S 56卒)			
	前田 隆 (S 57卒)			

各支部会長名簿

東京修猷会会長	伊藤 哲朗 (S 42卒)	熊本修猷会会長	井上 昌治 (S 51卒)
中京修猷会会長	嶋尾 正 (S 43卒)	宮崎修猷会会長	南嶋 洋一 (S 29卒)
近畿修猷会会長	芦原 直哉 (S 45卒)	鹿児島修猷会会長	吉村 望 (S 27卒)
北九州修猷会会長	津田 純嗣 (S 44卒)	沖縄修猷会会長	灰淵 英昭 (S 42卒)
佐賀修猷会会長	駒井 英基 (S 49卒)	東北修猷会会長	出納 克彦 (S 45卒)
長崎修猷会会長	中牟田真一 (S 41卒)	中国四国修猷会会長	河野 浩 (S 46卒)
大分修猷会会長	井上 正文 (S 44卒)		

あとがき

令和初の菁莪発刊にあたり、同窓生の皆様には素晴らしい原稿をお寄せいただき、誠にありがとうございます。随想、修猷会各支部のご報告、周年事業での楽しい様子などを拝読し、館友の方々の間で脈々と連なる「修猷」の姿に感銘を受けました。

昨年は例年にも増して自然の脅威を感じる一年であったように思います。8月には九州北部豪雨、9月には台風15号、19号による大規模な洪水や停電と、被害に遭われた同窓生の方々は心よりお見舞い申し上げます。

9、10月のラグビーワールドカップでは、日本代表の快進撃に熱狂された方々も多くおられたのではないのでしょうか。昭和53年卒の我々としましても、当時福岡を代表して花園全国大会に出場した修猷ラグビー部の奮闘が脳裏に蘇り、より一層胸が熱くなりました。

今年はいよいよ東京オリンピックが開催されます。世界各国の代表が繰り広げるであろう熱い戦いと思うと心が躍ります。館友の皆様には於かれましても、益々のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

末筆ながら、本年度の菁莪編集にご協力いただきました皆様には、委員一同深く感謝申し上げます。

ご意見やご質問、ご鞭撻のほどお寄せいただけましたら幸いです。

つつみ記

修猷館同窓会誌

菁 莪

発行者 修猷館同窓会

福岡市早良区西新三丁目十二丁十四
電話(〇九二)八二一―〇六六三
FAX(〇九二)八二一―〇六七二

代表者 川崎 隆生

発行日 令和二年一月三十一日

編集者 菁莪編集委員会

森下七百枝・鞍垣 吉政
小柳 有美・堤 勝也
石田 淳子・石橋 顕
能見 信二・田中 健吾
村上 弘

印刷 祥文社印刷株式会社

✳ 2020

修猷館同窓会総会

フレフレ 修猷
2020 SHUYU

ホテルオークラ福岡

2020年5月29日(金)

18:00~20:30
(17時受付開始)

一般前売 7,000 円

当 日 8,000 円

令和2年卒 2,000 円

2020 ✳

◇ チケット問い合わせ先 ◇

050-5362-9689

さんゆうかい
平成3年卒 讚猷会



第44回修猷OBゴルフ大会

2020年5月31日(日)

福岡カンツリー倶楽部
和白コース



